東光原 53

熊本大学附属図書館報 Kumamoto University Library Bulletin
TOKOGEN ISSN 0917-7604 http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/tokogen/
March 2009

特集号

第一回 東光原文学賞 受賞作発表

東光原文学賞の創設にあたって

附属図書館長　田口宏昭

熊本大学附属図書館が公募した第一回東光原文学賞の授賞式が、去る1月16日午後1時から附属図書館館長室でとりおこなわれた。

大賞1名、優秀賞2名の学生に表彰状と副賞がそれぞれ手渡され、記念撮影後、受賞者は順次、熊本日日新聞の記者のインタビューに満面の笑みを湛えて応じ、受賞の感想などを語った。

この誌面をかりてこの事業の第一回が完了したことをご報告申し上げる。ご協力いただいた全学の関係各位と、小野友道選考委員会委員長（熊本保健科学大学学長）はじめ学内外の選考委員の先生方に篤くお礼申し上げるとともに、通常の職責以外にこの事業のために特別の時間を割くことになった附属図書館関係各位の労をねぎらい、ともにこのたびの成功を喜びたい。

この東光原文学賞が創設されたいきさつを簡単に紹介する。

私が附属図書館長に就任して間もない一昨年の4月、福岡市内で九州地区大学図書館協会の恒例の会議が開催された折に、ある部会の席上で琉球大学の親川館長が、3年ほど前に創設された文学賞のことについて簡単に紹介され、館長の発案で創設された最初の文学賞の公募に30編をこえる応募があったことを知った。

さらに詳しいことを知りたいと思った。

その年の8月から9月にかけて沖縄本島での科研費の調査研究のついでに訪ねた琉球大学附属図書館の親川館長らとの懇談の席で、現役の同図書館司書のなかに沖縄県ではよく知られた詩人がおられること、沖縄県出身の芥川賞、直木賞作家のこと、文学に関心を寄せる若い年齢層の広がりがあることなどが話題になった。

沖縄訪問から数ヵ月後、松藤学術情報総主幹と島田図書課長（当時）に本気で文学賞の創設の相談をもちかけた。幸い快い同意が得られ、二人は早速、全国の大学の文学賞についての情報収集をすすめ、その情報の分析をもとにたたき台を作った。館内の管理職の方々にも集まっていただき、協力方を要請した。

さらに様々な角度からの検討を重ね、20年3月の図書館運営委員会に諮ったのち、崎元学長に相談して基本方向を確認していただき、その後、全学の会議で周知し協力を依頼した。

このような経過を経て、いよいよそれは20年度に実施する附属図書館の事業の一つとなった。この計画の最終的な具体化の実務は、前任者の学内異動等に伴い、平成20年4月から現在の梅原学術情報部長、永田図書課長、宮田副課長、浦田副課長にバトンタッチされた。

館内では、ポスターの作成をはじめ、学内への広報の準備が着々と

すすめられ、公募を開始したのは5月後半である。それから夏季休暇をはさんで9月半ばを迎えた。9月16日時点の応募は2編のみであった。10月に入るとそれは一気に増え、10月末の締め切り日に応募総数は29編となった。図書館職員一同、ほっと胸をなでおろしたものである。

全国の国立大学法人のなかでは、このような文学賞を持つ他大学の例は、調べた限りでは先述の琉球大学と弘前大学の二例のみである。

この無鉄砲とも言える事業のねらいが知・徳・情のバランスを備えた人材を育成し、またあわせて昨今の大学生の読書ばなれ図書館離れの流れを押しとどめ、文章作成能力の涵養をはかることにある、という当初の導入理由の説明がやがて前向きに検証される日の遠からず来ることを期待したい。

とともにこの事業のもう一つのねらいは、目に見える実利のみがややもすると尊重される時代に、人間にとって何の役にも立たない不用の営みと評価される向きもある文学作品の創作や読書が、長い時間の物差しをあてれば、実は「不用の用」として人間に生きる力を与え、私たちの人生を意味豊かに支え、人間と人生への深い思索へと人を導きつづける力を秘めていることを、学生諸君をはじめ多くの方々に是非知ってもらうことにある。

東光原文学賞が永続することを願ってやまない。

たぐち　ひろあき　文学部教授

後列：小野・西川・西槇
前列：永尾・島田・館長・折朽

第一回東光原文学賞大賞受賞作品

深海魚

島田ひとみ

あの日はひどい雨だった。風もとても強かった。小さかった僕は吹き飛ばされかけた。

大型台風が僕の町を直撃したあの日、八歳だったぼくは家を抜け出した。

町には人の姿はほとんど見られず、町は凶暴な自然の力に支配されていた。

町は僕のものだった。

大人用の水色のレインコートを被って、フードの中に少しでも雨が降り込むのを食い止めようと、小さい手は顔の前で十字を切った。しかし、それはまったくの無駄なあがきでしかなかった。

危ないぞ、とか、お家はどこなの、とか、何をしてるの、と車の中から声をかけてくる大人たちは沢山いたが、僕はそれらをすべて無視した。

レインコートは風を受けてびゅんびゅん、マントみたいに舞って、ぼくを後ろへ後ろへと飛ばそうとした。

それでもぼくは、その力に逆らって、ありったけの体重をつま先に乗せてジャンプして着地を繰り返すような動作で前へ進んだ。

ぼくにはどうしてもその日、行かないといけないところがあったんだ。

そこに着いた時にはレインコートの下まで、全身びしょぬれだったが、そんなこと、僕には関係がなかった。だって、僕は、ここに、プールに、泳ぎに来たんだから。

高田市民プール、そこは、普段なら僕の家から歩いて10分ほどで着くのだけれど、その日は、もっとずっと長い時間をかけてたどり着いたと思う。

八歳の頃の僕は、学校さえ休みになる台風の日に、そこが閉まっているのではないか、なんて心配は全く抱かなかった。そして実際行ってみると、そこは当たり前のようにぼくを迎えてくれた。びしょぬれのまま中に入ると、いつも監視員をしているおじさんが簡易椅子に腰かけて暇そうに新聞を読んでいて、僕を見ると怪訝な顔をして近づいてきた。

「淳、こんな日に、こんなに濡れて、ひとりできたのかい？お母さんはどうした」

おじさんが、心配そうに僕に問いかけた。ぼくはよく、そこに母と

二人で泳ぎに来ていたので、その人とは顔馴染みだった。
「今日は僕一人。ちゃんとお母さんに言ってきたよ」
僕は嘘をついて、ポケットにそのまま突っ込んでいた百円玉と十円玉三枚おじさんに渡す。彼はそれを受取らずに、ぼくの眼をじっと見つめた。ぼくは、自分の目が泳ぐのを止められなかった。おじさんは僕の嘘をすっかり見抜いていたくせに、しばらくの間大きく見開いた眼で僕を検分した後、僕の頭をぐしゃぐしゃと掻き回して、笑いながらこう言ったんだ。
「今日はお前以外に客はいないんだ。お金はいらないよ。こんな日に来てくれたんだから、大サービスだ」
人差し指を口元にあてて、今日のこと、誰にも言うんじゃないぞ、と付け加えてから中に通してくれた。

室内は、しんとした中に心地よい音楽で満たされていた。あれは今思えばボサノヴァだった。プールは凪いだ水で満たされていて、高い天井に付いている六個のライトを受けてキラキラ光っていた。
僕が立っている満たされた静かな空間とは打って変わって、大きな窓ガラスからは木々が暴風を受けて大きく反り返る様や強い雨が地面や建物を激しくぶつのが見える。そのギャップに、気分が高揚して、勢いをつけてプールに飛び込んだ。レーンなんて気にせず縦横無尽に泳ぐ。
誰もいないプールで、でたらめに泳ぐ・・・その日はすべてが自分のもののように感じられた。
ゴーグルの中が透明な液体で浸食されていくのに気が付いた。僕はゴーグルも、帽子も全部脱ぎ棄てて、深く潜った。プールの底から仰向けになって水面を眺める。ぼやけた視界の中で、光がゆらゆら揺れて、絶えず色んな色に変化していた。僕の吐いた息が気泡になり、そこに混ざって消えていく…

それがとてもきれいで、僕の思考を蕩けさせていった。そうしたらだんだん、僕は水に馴染んでいって、人間じゃあなくなっていったのだ。
あのとき、僕は、確かにさかなだった。

「それで？淳はさかなになって、どうやってもとに戻ったの？」
由香子が僕に面白そうに尋ねる。
「さあ、どうだったのかな、忘れたよ。こんな話、つまらないだろ？」
「ううん、すごい面白いよ。私、さかなになったことある、なんていう人、君以外に知らないもの。淳の話は、いつも奇想天外で、私は淳と喋るのが一番楽しいんだよ」
そういって八重歯を見せて笑う。僕たちの手元にあるコーヒーカップはとうの昔に空っぽになっていた。僕と由香子は同じ中学校に通う同級生だ。
たまの放課後、帰りが一緒になると、帰り道のファーストフード店にこっそり寄って、僕たちはたくさんの話をした。
由香子はとても聞き上手で、絶妙なタイミングで素敵に相槌を打ってくれるので、気がついたらいつも僕の話ばかりしていた。

由香子は僕の、たったひとりの人間の友達だった。由香子にはたくさん友達がいて、休み時間はいつも、たくさんの同級生に囲まれていた。それに対して僕は休み時間になると、決まって校長室の隣に置いてある大きな水槽の前に座って、魚たちがすいすい泳いでいるのをぼんやり眺めていた。
ある日、いつものようにそうしていた僕に由香子は近づいてきて話しかけた。
「いつもここにいるよね。魚、好き？」
「うん」僕は由香子の方を向いてそれだけ答えたと思う。

「わたしも好き。ね、なんていう魚かわかる？」
「しらない。魚は魚だよ。種類とかは興味ないんだ」
「ふぅん。不思議だね、橋本くんって」
「ところで、」と、少し迷ってから由香子は続けた。
「私の名前わかる？同じクラスの隣の席に座ってるんだけど」
「知ってるよ。葉山さん、でしょ」
「なぁんだ、知っていたんだ、よかった。名前なんて知らないよ、とか言われるのかと思った」
　由香子は茶化して笑った。私たち、名前順で前後だから、日直とかいっしょじゃない。よろしくね。そう言って差し出された手を僕は握り返した。
　由香子は自分のスタイルを崩さず、自然に僕に関わってきてくれた。つまり、僕をたくさんの友達の中に引き入れようとしなかった。僕がそれを望んでいないことを分かっていたからだと思う。はっきり言って僕はクラスの中で浮いていたけれど、彼女はそれを気兼ねせず僕に話しかけてきた。僕も由香子と話すのは楽しかった。周りには不思議に見えたかもしれないが、僕らはとても気があった。そうしてあっという間に一年が過ぎて、二年になってもぼくらは同じクラスにいた。

「そろそろでようか」
「そうだね。ね、続き、思い出したら聞かせてよ」
　外にでると、もう夕闇が迫っていた。ずいぶん長いこと店に居座っていたようだ。
　ほとんど車通りのない狭い路地を並んで歩きながら由香子が尋ねてくる。
「淳はさ、さかなになったことあるから、いつも玄関の水槽のところにいるの？」
　僕は少し考えてから答える。
「気味悪いかもしれないけど、・・僕はまだ、自分が人っていうよりさかなのような気がすることがあって。それで、水の外からでも、魚を眺めてるとなにか伝わってくるような気がするんだ」
「ふぅん、そっかぁ」
　全然気味悪くなんかないよ、と付け足して僕の顔を見て由香子は笑う。
　じゃあさ、とさらに由香子の質問は続く。
「学校の魚に名前付けて呼んだりしてる？」
「名前なんて、つけないよ。名前なんてつけなくても、全員友達で、誰が誰だかわかるし、呼び合えないのにつける名前なんて、意味がないと思うんだ」
「わかるような、わからないような・・・」
　由香子は首をかしげてそう言って続けた。
「淳はさ、サザエさん一家みたいに、カツオとかイクラとか、そういう名前だったら良かったのかのしれないね」
「どうして？」
「サザエさんの最終回は、なんて話、聞いたことない？みんなで乗っていた船が難破して、サザエさんがサザエに、カツオはカツオに、いくらちゃんはいくらになって、みんな海に帰っていくの。淳も魚の名前だったら、海に帰れるかもしれないのに」
　そう言って悪戯っぽく笑った由香子を、僕はかわいいと思った。
　僕らは少しだけ遠まわりをして、いつもの角で由香子と別れた。そこから少し歩いたところにある、木造のボロアパートな二階の一室が僕の家だった。階段を上って二番目の部屋に僕は母と二人で住んでいる。
「ただいま」玄関に入ると味噌汁らしい良い匂いが漂ってくる。「お帰りなさい。もうすぐご飯ができるから、ちょっと待って」母の声が

キッチンのほうから聞こえてくる。
　ちゃぶ台の上には既にほうれん草のおひたし、ご飯のお櫃、トマトとブロッコリーのサラダ、納豆、なすびのつけものが並んでいた。そこに母が丸いお盆をもって現れる。食卓に味噌汁と鯖の味噌煮も加わって、僕らは向かい合って座布団に座った。いただきます、と手を合わせてから納豆を混ぜたくる。ほのかに生姜の香りがする、キノコやらワカメが入った味噌汁を口に含む。暖かくてホッとする。サバの味噌煮に箸をつける。とろっと口の中で蕩けたそれを味わいながら、僕はかつては水の中で泳いでいたそいつに想いを馳せた。
　僕はさかなだったことがある、と言ったその日に、こうして躊躇いなく魚を喰らうのは恐ろしい行為なのだろうか。でも、海の強い魚、例えばサメのような、奴らは容赦なく小さくて儚い生き物を喰らう。だから、僕がこうして魚を味わうのは、弱肉強食の原理に適った許される行為だと思うのだ。僕は、海に還ったら、ひどく獰猛で、皆に嫌われるさかなになるだろう。でも、こうして本能とはかけ離れているところで食べることを考える僕は、悲しいことにこれ以上なく人間なのだ。
「おいしい？今日のお魚、結構自信作なんだけど」
　母のことばで急速に現実に引き戻される。
「うん」
　たしかに、臭みがないし脂が乗っていて、文句なしにおいしい。
「今日は由香子ちゃんと帰ってきたの？」
「うん」
「そう、よかった。淳にも仲が良い子ができて。お友達呼んだことなんて、今までなかったじゃない。お母さん、ちょっと心配してたのよ。また遊びに連れて来てよ。会いたいわ。私、由香子ちゃん大好きだわ。素直で、明るくて」
「うん」
「もう。うん、うん、てそれしか言わないんだから。淳は家にいるときもあんまりお母さんと話してくれないからつまらないわ。男の子ってそういうものなのかしらね。由香子ちゃんが家の娘だったらいいのに」
　母はため息をついて肩を落とした。手早く晩御飯を済ませると、母はまた仕事に戻った。母は、この近くの病院に勤める看護婦で、こんな風に夕飯を食べて夜勤に就くことは珍しくなかったので、夕食の後片付けは専ら僕の仕事だった。食器を洗って片付け、拭いたちゃぶ台を端に寄せてスペースを作ると、座布団を枕にして大の字に寝転んだ。ぼうっと天井を眺めていたら、箪笥の上に置いてある、小さな金魚鉢が目の端に留まった。
　僕は昔ここにいた父親のことを思い出した。
　僕が物覚えがついた頃から、父は朝だろうが昼だろうがお構いなく、酒を浴びるほど飲んだ。いつも真っ赤な顔をして、黙りこくったかと思うといきなり奇声を発したりした。家の中にはいつも酒瓶がごろごろ転がっていて、僕はしょっちゅうそれらに躓くのを、父は笑って見ていたのを覚えている。なにか気に入らないことがあると、僕を大声で詰りながらしこたま殴った。
「お前だって俺のことを馬鹿にしているんだろう。そんな眼で見やがって」
　七歳の僕が理解できた言葉はこれだけだった。
　そんな父の唯一の趣味が釣りだった。家にいないときはいつも海に出ていた。そして、夕方になると、いつも手ぶらで家に帰ってきた。そう、彼は釣りの収穫を家に持ち帰ったことはなかった。たった一回の例外を除いて。
「お父さん、お父さんは釣りに行くのに、なんでいつもお魚を持って帰ってこないの？」
　ある日、上機嫌で釣りから戻った父に、僕は恐る恐る尋ねた。

「馬鹿、淳お前はなんもわかってねえなぁ。魚はな、水の中ですいすい泳いでるのが一番きれいなんだ。陸に揚げてから持って帰るなんて、商売でもねぇのに、そんな悪趣味なことできるか」
そう言って父はガハハ、と笑ってまた酒を煽った。

夏休みになった。夏休み中は学校の花壇の手入れが二人1組の当番制で回ってくる。僕と由香子は席が隣どおしだったのでペアだった。今日はその当番の日で、早く着いたので先に花壇に水をやっていた。
「ごめん、おそくなって」
振り向くと、膝までの白いワンピース姿の由香子がいた。小麦色に日焼けした肌にノースリーブのそれがとてもよく似合っていた。
「ううん。僕も今さっき来たところだよ。早く済ませよう」
なんだか目を合わせるのが照れ臭くて、僕は素っ気なく顔を伏せた。僕らは手分けして水やりを済ませた。花壇には向日葵が僕らの背を越して太陽の光を浴びて黄金色に輝いている。その足元にはオレンジ色のマリーゴールドやメランポジウム、ペチュニア・・・夏の花々が逞しく咲き誇る。由香子に眼をやると、長く蔦を伸ばした昼顔に手を伸ばしていた。それは淡いピンク色に色づいて、顔を開いていた。由香子が僕の視線に気がついて、僕を振り返って言う。
「私、こういう日本の花が一番好きよ。朝顔、昼顔、水仙、あと紫陽花も」
「きれいに咲いてるね。どうせ、夜になったら閉じちゃうんだいくつか持って帰れば」
由香子には昼顔がとてもよく似合っていた。だからそう言ったんだ。
「だめだよ。花は、こうして土と繋がっているときが一番きれいじゃない。もうすぐ閉じちゃうってわかっていても、ううん、わかっているからこそ、このままの方がいいんだよ」
由香子は首を傾げて笑った。彼女の肩に切り揃えた真っ直ぐな髪が揺れて、太陽の光を受けてきらきら光った。僕はそれから目が離せなかった。
「よし、さっさと雑草取って帰ろう。こんなあっついところ、耐えられない。早く終わらせてアイス食べようよ」
そう言って、雑草取りに取り掛かる彼女に、僕も倣って隣に腰かけた。僕はさっきの由香子の言葉で、魚を釣っても海へ帰した父を思った。由香子にはその心がわかるのだろうか。
「なに考えてるの、いきなり黙って神妙な顔して。おかしいったらないよ」
「ごめん。ぼーっとしてたよ。こういう単純作業って、思考が蕩ける」
「思考が、とろける、て？」
「なんだか、自分の中で、いろんな考えや気持ちが全部混ざり合って、境界線があいまいになることってない？僕は、走ったり、掃除したりしてるとそういう感じになる」
「うーん、確かにそういうの、私にもある。思考がとろける、ね。素敵な響き。だけど、」由香子は泥だらけの手で僕を小突く。「私のとなりでとろけさせないで」その顔はいたづらっぽく笑っていた。僕もつられて笑う。「ごめん」とりあえず謝って、さっき思い浮かべたこと、父と釣りの関係を話してみた。由香子は、草むしりもやめて、真剣な様子で僕の話を聞いてくれた。
「たしかに私、淳のおじちゃんの気持ちわかる気がする。おじちゃんはさ、魚とすぐ近くで触れ合いたくて釣りしていたんじゃないのかな」
僕が話し終わると、由香子はじっくり時間をかけてそう言った。自分の考えをうまく絞り出して、正確に僕に伝えようとしてくれていたんだと思う。由香子はいつも、そういう誠実さをもって僕に接してくれた。
二日に一回当番が回るおかげで花壇はそこまで雑草に占拠されているわけでもなく、僕らは思ったより早く仕事を終えた。帰り道、学校

の近くにあるコンビニに寄ってアイスバーを買った。その場で包を破ってほうばる。冷たい。さっきまで冷凍庫のなかに入っていたアイスは外界に出るとすごい勢いで溶けだす。慌ててそれを口の中に流し込む。アイスは口の中で冷たい液体となってのどを流れていく。身体が内から冷やされていく。僕らはアイスを食べながら、目的もなく歩いていた。突然思いついたように由香子が言った。

「ね、海に行こうよ」僕が反対するわけもなく、海へと向かった。

僕らは海沿いの道に出た。断崖から視界一面に海を見渡すことができた。ガードレールの下を覗くと海水浴を楽しむ人たちがちらほら見えた。風が吹くたびに、ほのかに磯の香を運んできて、汗でじとっと湿った肌を優しく撫でてくれた。由香子は小さい子供のするように、縁石の上を歩いていく。端まで来たらまた次の縁石に乗り移る。バランスを崩して横に傾く。手を使って上手にバランスをとる。そんなふうに前を行く由香子の髪が右へ左へ風になびくのを、僕は後ろから黙って眺めていた。

「淳は、お父さんが大好きなんだね」

唐突に由香子が先を歩きながらそう言った。そのとき由香子はどんな顔をしていたのだろう。由香子は続けた。

「淳は、好きなものの話をするとき、すごいやさしい眼になるんだよ。知ってた？お父さんの話してるとき、そんな眼してたよ」

縁石に乗った彼女の目線は僕とほとんど同じくらいの高さにあった。振り向いて笑った彼女の顔が、逆光ではっきり見えなかったけれど、何故か寂しげだった。道のコーナーに差し掛かると、彼女は縁石から降りて、ガードレールを跨いで越えた。ワンピースの裾が海の方へはためく。

「危ないよ」僕が後ろから声をかける。

「大丈夫。大丈夫だから、淳もこっちにおいでよ」

躊躇いはしなかった。僕は言われるがままに由香子の側に行った。僕らは並んでガードレールに腰かけた。

「ここから夕日が沈むのが綺麗に見えるの。ここで沈むの待ってよう」

「まだ、五時にもなってないよ。太陽だってあんな高いところにいるし」後ろをスピードの速い車が通り過ぎた。

「じゃあ、ちょっとだけここで休憩しよう。風が涼しいから」

「うん」僕らは黙って海を眺めていた。また何台か速い車が通り過ぎる。僕は、頭の中で数えていた。

「ね、今何台車通ったか数えてたでしょう」由香子が言う。

「なんでわかったの？」僕は驚いた。

「そんな気がした。不思議だけど、淳の思ってることがわかるような気がするときがある。時々、だけど。ね、それで何台通ったの」また速いのが通り過ぎた。

「六台。今のを入れて」

「うそ。私は七台だったよ」

「なんで一台多いの」

「淳が少ないんだよ。困ったな、こんなのどっちが正しいのかわからないよね」

「まぁ、どっちでもいいよ」

確かに、と言いながら二人して笑った。そして由香子は僕の方を向いて、唐突な質問を投げかけた。

「ね、淳は将来何になりたい？」

「僕は、どこか外国で井戸を掘る人になりたい」

「へえ、そうなんだ」驚いたようだった。

なんでか、聞いていい？と、遠慮がちに由香子は聞く。うん、と僕は答える。僕には由香子に聞かれたくないことなんてない。由香子は、僕が考えていることがわかる気がする、と言った。僕はその理由が分かる。僕には彼女に隠したいことが何もないからだ。

「僕が将来できる、一番すごい贈り物はなんだろうって、考えたんだ。そうしたら、ある日、井戸を掘ろうって思いついた」
「思いつき？」
「そうだよ。思いつき。でも、この世界の、たいていのものは思いつきで成り立っていると思うんだ」
「例えばどんな？」
「例えば、ライト兄弟が飛行機を作ってみたりとか、エジソンがフィラメントに竹を使ってみたりとか。あと、今日の朝ごはん、ホットケーキ作ってみよう、とか」
「そんなに緩い基準だったら、本当に何でも思いつきね」
呆れたように笑ったのをやり過ごして、僕は由香子に聞き返した。
「由香子は、将来どうしたい？」
「わたしは・・」由香子は言いよどんだ。
波の音が心地よく耳に響く。遠くに船が浮かんでいた。海と空が混ざり合って境界がわからなくなっている。遠くに見える船は宙に浮かんでいるように見えた。僕はそれをぼんやり見ていた。時間は止まったようだった。僕は由香子の中にある、大事ななにかが音になって、その口から飛び出すのを何時まででも待っていたかった。
「淳って、モモみたい」
由香子がそう口にするまで、ずいぶん長い時間がたったような気がした。僕の質問への答えではなかったのだけれど。
「モモ？」
「うん。小さい頃読んだ本の主人公。友達の話をじっと聞いて、いくらでも待ってくれるの。淳はそういう感じがする。だから淳といるとすごく安心するんだ」
詳しい内容はよく覚えてないんだけど、と言いながら由香子は立ち上がった。
「そろそろ行こうか」

由香子はそう言ってガードレールを跨ぎ、元の道に戻った。僕はそれを追いかけ、後ろに続いた。僕らは浜へと続く階段を降りて、あてもなく海岸線を歩いた。さっきよりそばに波の音があった。
「淳のお父さんは、今でもこの海に釣りに来るの？」
「ううん。昔はここに来てたんだろうけど。・・父さんは、僕が小さい頃、釣りに出たまま帰ってこなくなったんだ」
由香子が僕を振り返った。僕はしゃがんで足元に落ちている貝殻を拾った。
「父さんはなんで帰ってこないのかって母さんに聞いたんだ。そしたら」
めったに見られないほど大きな貝殻だった。淡いクリーム色で、サーモンピンクの渦模様が正しく描かれていて、とてもきれいだった。僕の方を見たまま立ち止っている由香子に近寄って、それを彼女の手のひらに乗せてから、僕は続けた。
「父さんは、さかなになったんだって、だから海から戻ってこれなくなったんだって」由香子はまっすぐな瞳で僕を見ていた。なぜかそれを見ていられなくて、代わりに海を見た。父を呑みこんで離さなかった海を。
「そっか、・・そうなんだ」由香子それだけ呟いて、また黙った。沈黙には優しさがあった。そこには波の音と、遠くで遊んでいる子供の声だけがあった。僕らはそのまま海を眺めていた。いつの間にか、太陽は夕日に変わっていた。夕日は海に端のない長い絨毯を引いた。オレンジ色のそれは波に任せてゆらゆら揺れた。そしてついに海は夕日さえも呑みこんでいった。
「帰ろうか」
「うん」
日が落ちたら暗くなるのは早かった。僕らは些細な話をしながら、元の道をたどり帰り道についた。いつもの別れ道で、由香子がバイバ

イ、と手を振りながら去って行くのを見送った。何度か、彼女は僕を振り返る。それが、なにかを訴えたいことがあるように見えたけれど、僕はただそれをぼんやり眺めていた。。

まだ僕の家に父がいたころ。ある寒い日の朝のことだ。眼が覚めたら天井がぼやけていて、起き上ろうにも身体が強張って起き上がれなかった。助けを呼ぼうとしたが、声もしゃがれて出なかった。ぜいぜい変な音を出す僕に母が近づいてきて額を触れ、「あら大変、すごい熱」と言って慌てていたのを覚えている。そんな日でも、父は普段どおり釣りに出て行った。僕は布団の中からその後ろ姿を見送った後、母に薬を飲まされ、そのまま眠りこけた。

目が覚めると部屋は真っ暗だった。母は仕事に行ったのだろう。しいんとしていて、そこに僕だけしかいないようだった。しばらくぼうっと天井を見ていた。だんだん眼が暗闇に慣れると、いつもの部屋が姿を現してきた。すると、眼の端になにかキラッと光るものが映った。それは魚の鱗だった。枕もとには小さな金魚鉢が置かれていてその中を小さなフナが気持ちよさそうに泳いでいたのだ。カーテンの隙間からほのかに漏れ入る街灯の明かりに照らされ、そのつやつやした身体が、つつましく、また神々しく光った。お父さん、と呼んでみた。しかしそれは声にならなかった。僕ののどは病魔に占拠され思い通り動かせなかったから。かわりに大粒の涙が、堤防を決壊して、とめどなく頬を伝った。僕の枕は涙やら鼻水やらでぐちょぐちょになった。しゃがれた声で紡がれる嗚咽が僕の口を出て、僕の耳に帰ってきた。変な声、とまれ、と何度も念じたけれど、止められず、いつのまにか意識がなくなっていた。きっと泣き疲れて眠ってしまったのだろう。

次の日、目が覚めると、まだ僕の隣にフナがいた。

「夢じゃなかった」確認するように、そう口に出してみた。

これは父が、たった一度家に魚を持ち帰った日の記憶。そして、それは父が僕にくれた最後の贈り物だった。

あっという間に九月になって、学校が始まってすでに三日がたった。しかし僕の席の隣に由香子の姿は無かった。

「橋本君」

後ろから声をかけられ、僕は振り返る。

「先生」

「葉山さんのことなんだけど、ちょっといいかしら」

そう言って、僕に近づいてきたのは、担任の英語教師だった。高田先生はまだ若くて、熱心で、生徒にもとても人気がある先生だ。

「葉山さん、学校が始まってからずっと休んでいるでしょう。なにか聞いてない？あなたたち、夏休みの当番いっしょだったわよね。そのときは、様子が変だったとか、なかった？」

高田先生は本当に心配そうな様子で、顔にかかった長い前髪を掻き揚げて僕の顔を覗き込んだ。

「夏休みに会ったときは具合が悪かった様子はなかったと思います。葉山さんは、どうしたんですか？身体が悪いんですか？」

先生がそんなことを聞きたがっているわけではないことは分かっていた。病気だったかなんて、僕に聞く意味がない。家から連絡がいくだろう。

先生は少し逡巡しているようだった。瞳を何度か左右に動かした後、また僕に焦点を合わせて思い切るようにして僕に言った。

「葉山さんは今、お家の事情が少し大変なのよ。彼女、そんな話あなたにしなかった？」先生は、このこと絶対誰にも言わないでね、と付け加えた。

「聞いていません。なんでぼくに聞くんですか。葉山さんには僕以外にもいっぱい友達がいるのに」学校で、僕と由香子はいつも一緒にいるような間柄ではなく、彼女には行動を共にすることが多い友人がも

っと他にたくさんいた。

「先生、橋本君に謝らないといけないことがあるの」高田先生はいきなり、僕の質問とは関係のないようなことを話し始めた。

「二年になってすぐくらいにね、私は橋本君がいつもひとりっきりでいるのが心配だったの。葉山さんとは仲がいいみたいみたいだったから、彼女に、相談したことがあるのよ。橋本君をみんなと仲良くできるように、グループにいれてあげられないかって。そうしたら、淳はそんなの望んでないし、ハブられてるわけでもないから、無理に何処かにはめ込もうとしないで、淳はあれでいいんです、て怒られちゃってね」先生は、少し苦笑しながら続けた。

「それから橋本君のことをよぉく見てたら、葉山さんが言いたいことがわかってきたの。余計なことするところだったな、て反省してるの。ごめんね」先生が僕に小さく頭を下げた。ぼくもそれにお辞儀を返した。先生は話を続ける。

「葉山さん、どうしていようが、淳は私の友達だし、私は淳といるときが一番安心します、て言ってたわ。彼女、あなたにとても心を開いていたんじゃないかしら。だからあなたなら、なにか知ってるんじゃあないかと思って聞いたのよ」

「すみません。なにも知らないんです」

先生は、そう、引き止めて悪かったわね、と少し当てのはずれたような顔をして去っていった。僕は本当に何も知らなかった。

でも、少し前から気がついたことがあった。由香子は自分の深い部分を話したがらない。由香子は僕のこと、つまり、僕の考えていることや、僕の家族の話を聞きたがった。僕はそれらに答えてから、由香子は?と何度か聞いてみたことがある。由香子はそんなとき、彼女らしくない曖昧な言葉で濁した。そして、たまに彼女の眼に薄い膜が張るのを見た。

これは僕が彼女を好きだから気がついたことだ。

それから何日か経った。やはり由香子は学校に姿を見せなかった。

ニュースでは、大型台風の接近が告げられていた。〝大型台風一五号は今現在台湾に上陸中で、明後日の朝には暴風圏内に入る模様・・・〟

こういうニュースを耳にすると、父の命日が近いことを思い出す。

台風は予想通りこの街を直撃した。朝早くに連絡網で休校を知らされた。いつもは早くに出ていく母の姿も今日はまだキッチンに立っている。

「昨日夜勤だったから、今日は遅く出て行っていいのよ。せっかくだから、ゆっくり朝ごはんにしましょうよ」

そう言って、母はチーズとベーコンと大葉をサンドしたフレンチトーストに、サラダと紅茶を並べた。トーストはほのかに甘くバターが利いていて、外がカリカリ、中がチーズと一緒にとろけて、それにベーコンの塩味が妙にマッチして絶品だった。いつもの慌ただしい朝ごはんは、大抵ご飯と納豆、味噌汁で、母が〝ゆっくり朝ごはん〟という日はいつもこんな風な洋風モーニングだ。雨戸を激しく鳴らす雨の音や風の音が薄い壁を物ともせず、和やかな室内に入ってくる。僕と母はゆっくり朝食をとり、食後のコーヒーとアイスまで用意して、まるでイタリア人みたいに優雅な朝を過ごした。

それからしばらくして後片付けを終え、外の喧騒を聞きながら僕は本を読んでいた。

突然電話が鳴った。母が受話器を取る。本を置き、電話口で話す母の背中を眺めた。「…はい、わかりました、連絡網でまわせばいいんですね。はい、ありがとうございました…」丁寧に受話器を置くと、母は僕を振り返って言った。

「由香子ちゃんが朝から行方不明なんだって。連絡網で、誰か心当たりがないか探してるそうなの。あなた、どこにいるか知らないわよ

ね？」

それを聞くと、僕はなにも考えずに二人分の雨合羽だけを持って家を飛び出した。「淳、待ちなさい、淳！」後ろで母の叫び声を聞いたが、僕はそれに応えなかった。

僕は迷いなく雨の中を走った。由香子がどこにいるか、僕にはわかる気がしたから。

いつかのように、横殴りの雨と、暴風が僕を襲ったけれど、あの日に比べ僕は随分背が伸びて、体重も増えた。もう吹き飛ばされそうになることはない。由香子はたくさんの素敵なものを僕にくれた。僕はそれにお返しするものを何も持っていなかった。僕ができることがあるなら、なんでもやりたかったのだけれど。そして今僕に出来ることがあるとすれば、それは由香子を見つけることだと思った。

僕らはずいぶんいろんな所を歩いた。学校帰り、休日、季節も天気も気にせず、あてもなく彷徨った。とりわけ、由香子は海を見るのが好きだった。海沿いの道へ出て、僕らはよく海を眺めた。

「いた」

由香子は小さなベンチの上で体育座りをしていた。まるで雨の日の猫みたいにずぶ濡れで縮こまっていた。

「淳・・・なんで？」

彼女は膝の間にうずめていた顔を上げた。

「僕じゃなかったら誰が君をみつけるの」

由香子は夏の日に僕らが休憩したガードレールのすぐそばにあるバス停に座っていた。そこは朽ちかけた雨除けと囲いはあったが、強い風が吹くたびに雨除けはガタガタと音をたてて捲れあがりそこから雨が降り込んだ。

バス停の海側の壁には小さな窓が付いていて、海が見えた。夏の日の穏やかな海と打って変わって、津波が白い飛沫をまき散らしながら次から次へと海岸を襲っている。僕は、リュックに入れてきたレインコートを由香子に差し出して、その隣に腰かけた。由香子はそれを手に取ったまま着ようとしなかった。

僕らはずいぶん長いこと、黙ったままそこにいた。風に乗って飛んできた葉っぱが、僕の顔に勢いよく張り付く。「ぶっわ」僕は驚いて奇声を発する。由香子がこちらをちらっと見て、噴き出した。場違いのような笑いが続いた。僕もそれにつられて笑った。ひとしきり笑ってから、由香子は話し出した。

「淳といると、私すごく安心する。学校で、ひとりになりたい、誰とも関わりたくないときがあるの。でも私は小心者で、実際そうするのが怖くて、我慢していつも誰かと一緒にいる。淳はいつもひとりでいたよね。寂しいとか恥ずかしいなんて感じは全然なくて、いつも堂々とひとりでいた。それがうらやましくて、私、淳に声をかけてみたんだ」

僕は目の前の嵐を見つめたまま、黙って隣にいた。由香子は続ける。

「誰かと一緒にいると、余計寂しく感じることがある。ひとりでいるときより独りな気がして。それでも怖いから、誰かと一緒にいてどうでもいいことを延々話して面白くないことでも笑ってた。でも、淳と一緒のときはそうじゃなかった。寂しくなかった。なんでかな」

彼女がその答えを僕に求めているわけではないことが、僕には分った。由香子はすでに自分の中に答えを仕舞っていて、それを今問いただしている。僕はその鏡にすぎないのだ。だから僕はただそこに座っていた。

空が一瞬光った。一秒、二秒、三秒、そこまで数えたところで大きな音が僕らを襲う。

「お父さんとお母さんがね、」どこかで樹木が折れる音。しばらくの沈黙。

「離婚するの」由香子が泣いている。声が震えている。

「わたし、ずっと、お父さんお母さんは、二人だけどひとつだと思っ

てて、離れるところなんて、考えたことなかった。でも、違ったんだね。二人はふたつだったんだね。じゃあ私は？私はひとりで、ずっとひとりぼっちなのかな。なんだか、頭の中がぐちゃぐちゃしちゃって、家にいたくなくて、気がついたら飛び出して、ちょうど通りかかったバスに乗ったの。そしたら、バスがここに連れてきてくれたの。私が一番好きな場所に」そう言って、由香子はまた黙ってしまった。

由香子は今、どこか深い海に潜ろうとしている。子供の頃の僕がそうしたみたいに。

あの日母が僕を連れ戻してくれた。今度は僕がそうする番なのだ。僕は由香子の手に触れた。その手は雨に濡れて冷たく、細かく震えていた。彼女の右手に僕の左手を重ねた。

結局、悲しみのような感情を分かち合うには触れ合うしかないんだと僕は思う。由香子の悲しみが、その手の冷えを奪いながら、ゆっくり僕に流れこんできているような気がした。僕は、子供の頃に見た、深い海の底を思い出した。

父は癌だったのだ。そう母が教えてくれたのは、僕が中学生になって初めて迎えた父の命日だった。母はそれだけしか話さなかったけれど、あの日の父の死は自殺だったんだと、僕にはすぐにわかった。

父はとても弱い人だった。彼は告知に耐えきれず、浴びるように酒を飲むようになった。父はいろんなものから逃げていた。病気、家庭、世間、息子からも。逃げて逃げて逃げ切れなくなった先で結局、あの嵐の夜、大好きな海に呑まれることを選んだのだ。

その年の台風はとてもゆっくりとしたスピードで進んでいて、僕の街に長く留まっていた。夜が明けても外はまだ嵐だった。

あの日、朝になっても帰ってこないのを不審に思って、「おかあさん、お父さんはどこに行ったの」と聞いた。母は兎のように真っ赤に腫らした眼をしていたのを覚えている。母は僕をすごい力で抱きしめながら耳元で囁いた。

「お父さんはおさかなになっちゃったの。陸に上がれなくなっちゃったの。だからもう、ここには帰ってこられないのよ」

小さかった僕は、その言葉を真に受けとめて、自分もさかなになったら、父の所に行けると思ったのだ。そして僕は家を飛び出してプールに向かった。そのころの僕には海は遠すぎたし、水の中ならどこでもよかったから。

僕がプールの深い、深いところで水に蕩けそうになっていた時、今まで凪いでいた空間が大きくぶれた。次の瞬間、強い力で僕は水面に引き上げられた。

「淳、淳、なんで、あんたまで・・・」

半狂乱で泣き叫ぶ母の姿がそこにあった。母は着衣のままプールの中に入ってきていた。彼女の長い髪が海藻みたいに水面にゆらゆら揺れていた。母は僕に縋りつくようにその細い腕の中に僕を包み込んだ。

「あなたまで、私を置いていかないで」

静かだったプールは一気に現実味を帯びて僕に迫ってきた。母が僕を迎えに来てくれたのだ。母は、僕の身体の奥底にある金魚鉢の中にさかなを押し込んだ。そうやって母は深海から僕を引き上げたのだ。

監視員のおじさんが僕の様子がおかしいことに気が付いていて母に連絡をいれていたことを、僕は後になって知らされた。それに気が付いていても僕をプールに入れてくれたことを、本当に感謝している。

僕は、父が亡くなったということが理論的にわかっていなかったけれど、本能のどこかで理解していて、その深い悲しみを処理する術を知らなかった。あの日の僕にはああするしかなかったと今でも言い切れる。

深いプールの底は海に繋がっていた。そこで僕は父に出会った。父は背中をきらきら光らせて、身体をくゆらせながら気持ちよさそうに泳いでいた。僕は父に手を伸ばしたけれど、父は応えてはくれなかっ

た。こっちに来てはいけないとでも言うように。僕は父と、最後の別れを交わした。何度も何度も名前を呼んだ。僕と父だけのお葬式だった。

僕の中のさかなはどこにいったのだろうか？もう随分前から僕の中にいないのに、本当は気が付いていた。ずっと狭い金魚鉢の中を息苦しそうに泳いでいたそいつを、由香子はそっと掬って海へ還してくれた。だから今度は僕が由香子を助ける番だ。

由香子の手が僕の掌の熱で少しだけ暖められた気がした。

「みんな、誰だってひとりだよ。僕もずっとそう思ってた。だからいつだってひとりでいた。かわりに僕はさかなと話していた。水槽のなかで泳いでる魚に、僕の中のさかなを映していたんだ」由香子の様子を窺った。由香子は僕の方を見ていた。僕は続けた。

「でも由香子に会ってからそいつがいなくなったんだ。ずっと、僕の中で閉じ込められていたさかなを、由香子が海に還してくれたから」

「わたしが？」

「うん。僕は今だってやっぱり一人だけど、独りぼっちじゃない。今まで、由香子に僕の話をたくさんした。それが由香子の中に響いたのがわかったとき、独りじゃないんだって思えた」そして、口には出さなかったけれど、僕は由香子も同じ気持ちだと思っていた。しばらく黙って、由香子が口を開いた。

「お父さんとお母さんがね、喧嘩する声が、しょっちゅう私の部屋まで響いてたの。そんなの聞きたくなくて、いつも寝たふりして呪文を唱えてた。私はさかな、私はさかな、て。淳にさかなになった話を聞いたから、私もなれないかなと思ったの」そう言って由香子は少し笑って、続きを話した。

「そしたらね、きれいな海で淳と泳いでるのが頭に浮かんできて。本当にきれいな海だったんだよ。真っ青な青い水の中に私たち二人しかいなくて、底には珊瑚礁が広がってて。そうしたらいつのまにか眠ってた。私が淳のおさかなを海に帰してあげたの、そのときかもしれないね」

なぜだか僕は泣いていた。僕の膝に落ちた涙の粒はとても熱く感じた。由香子は笑った。

「何で淳が泣くの」そう言った由香子の瞳からも滴がこぼれおちた。わからない、と僕は泣きながら、同時に笑いながら言った。

僕らは笑った。気が済むまで笑って、また泣いた。気がついたら嵐はずいぶん勢力を弱めていた。台風の目に入ったのだろうか。遠くから、バスが近づいてくるのが見えた。

「乗ろうか」

由香子が言った。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫。もう、帰れるよ」

そう言って由香子はベンチから立ち上がり、バスに向かって手を振った。バスが僕たちの前で停車して、扉が開く。

「ありがとう、迎えに来てくれて」由香子はバスに乗り込みながら、後ろにいる僕を振り返ってそう言った。

「来年、夏になったら海に行こう。今度は本当に海で泳ごう」

僕は言った。

「うん。約束ね」由香子は僕が好きな綺麗な笑顔を見せてそういった。

バスに乗り込む前に、僕は海を振り返った。大波が浜を打ち、白い水飛沫が飛び散る。雨はその中に注ぎ込まれる。きっとこんな海に父は呑みこまれたに違いない。また来るよ。僕は父と僕の分身にそう告げて、バスに乗り込んだ。

（医学部医学科４年）

第一回東光原文学賞優秀賞受賞作品

森は語らない

永尾ミユカ

アナウンスが流れた。

目的地は雷雨のようだ。上空には積乱雲がうねりをあげ、着陸のための降下の際、少し揺れるらしい。

安全には問題がないと機長直々の説明だった。

「窓側のお客様」

僕は目をあけた。

「お荷物は前の座席の下に入れていただけますか」

あぁ、とくたびれたポーターのリュックをその小さなスペースにぐしゃぐしゃと無理矢理押し込む。

「ご協力有難うございます」

目鼻立ちのはっきりしたキャビンアテンダントはにこやかに微笑んで後方に去っていく。窮屈な座席でけだるい手と足の指を動かし、ゆるめていたスニーカーの紐を結びなおす。そうしてよいしょと体を起こして窓の外に目をやった。

真っ白だった。

窓の下半分に真っ白な雲の平原が広がっていた。何の混じりも動きもない白だった。残りの上半分は爽快なブルー。その境目には眩しいほどの光がにじんでいた。あまりの美しさに、いつまでも見つめていると眼が眩み、痛めてしまいそうだ。

少しゆれた。泣きだす赤ん坊。なだめる母親。はしゃぎ声をあげる子どもたち。隣の男はまだ新聞を読んでいる。

圧を感じた。着陸態勢に入ったのだろう。穏やかな平原は次第に薄れ、大気に溶けるように散っていく。小さな機体はその淡いベールの中に静かに沈んでいく。

二〇〇三年八月四日。「藤野さんて人から届いとったよ」と実家の母が葉書を送ってきた。なぜはっきり日付を覚えているのかというと、その日が僕の誕生日だからだ。かといって届いた葉書はバースディカードではなく、暑中見舞いでもなかった。

近々、屋久島に行く予定のある方、連絡ください.

登山地図あります.

藤野ゆかり

０９０-××××-××××

正直、藤野を思い出すのには少し時間がかかった。藤野は中学校の同級生だった。けれども同じクラスになったことなど一度もなく、ただ部活が同じソフトテニス部だった。たしかものすごく背の高い女子とペアを組んでいて、藤野はどちらかというと低いほうだったから、二人並んだときのでこぼこ具合が少し滑稽だった。藤野のラケットは当時一番新しかったミズノのテクノチャージシリーズの黒で、僕がほしがっていたラケットでもあったからとてもうらやましかった。

ポストの中の葉書を手にしたとき、僕は恋人と一緒だった。彼女は葉書をのぞきこむようにして

「だれ」

と尋ねた。

「よく覚えてないんだけど、たぶん中学の頃の同級生だと思う」

「ふーん」

彼女は何か訊きたそうだったけれど、自分から聞くのはプライドが許さないという目で葉書を一瞥し、ふっと長い髪とスカートをひるがえして階段のほうに歩いて行った。

それから二日後、藤野に電話した。本当は次の日にでもしたかったのだけれど、彼女が帰らずに結局また泊まったのと、なんとなくためらいがあったからだろう。そしてべつに僕には近々屋久島に登山しに行く予定もなかった。

書いてある電話番号にかけると普通に藤野が出た。名乗って簡単な自己紹介をすると、「やだ、真木くん!?」と声が二オクターブ上がった。キャーキャーから始まってペラペラしゃべり出し、なんと彼女は同じ県内の私立大学に通っていた。「僕もいま福岡なんだけど」と大学名を言うと、藤野は「頭がいいのね」と言った。そうして「会いたいわ」と藤野から言って、僕らは次の週の土曜日に会う約束をした。

その一週間の間に、僕はあらゆることを思い出した。

藤野はモテる女の子だった。ほとんどの女子が奇妙なほどに真っ直ぐな髪を背中いっぱいに垂らしていたのに対し（まるで宗教だ）、藤野は同じロングでもきゅっと一つに結び、小さくて形の良い額を出していた。それが僕らの中学の地味な制服に映えた。

テニスもうまかった。なんといってもサーブがすばらしかった。必ず上位に残る藤野たちペアを見に、毎回早々と試合を終えた僕らは、本部の建物を挟んで男子と反対側のコートに集まった。広いコートの端で、胸の前にラケットとボールを構える藤野は、頼りないほど小さく見えた。それが、主審のコールがかかり、ひとたび右手を背中に回して左手のボールを高くかかげた姿は、まるで白馬が後ろ脚で立ち上がったかのように堂々として一瞬の恐怖を与えた。動作はまるで力の抜けた、ゆっくりとしたものに見えたが、弾かれたボールは相手コートを突き刺すように落下した。そのたびに跳ね上がったスコートからちらりと見えるブルマが、思春期だった僕の目にもなぜか清々しくてかっこよく見えた。サービスエースを取ったときの藤野は満面の笑みでガッツポーズをした。

試合の後、「あの子紹介してよ」と他の中学の連中から頼まれたことは一度や二度じゃなかった。そのたびに僕は「一つ年上の彼氏がいるんだよ」と断らなければならなかった。部活帰りに二人の後ろ姿をよく目にした。サッカー部のキャプテンと藤野は他学年からも女子からも評判のベストカップルだった。

高校はその先輩を追いかけてか、県内トップの進学校に行ってしまった。別の高校に進んだ僕とはきっと卒業式以来会っていないし、僕の周りでは話題にもあがらなかった。

約束の土曜日、スターバックスの前で手を振っているのが藤野だと、すぐに気づいた。

「わぁ、真木くん？すごく久しぶり」
あれから六年経つというのに、変わらない晴れやかな笑顔で藤野は言った。髪型も色がちょっと明るくなったぐらいで、耳には小さなシルバーのピアスをしていた。細身のジーンズにヒールのない靴を履いているからか、あのころよりも華奢に見えた。
「うん。久しぶりだね。たしか中学校以来だから」
僕は少し緊張していた。
「真木くん、こうして近くで見ると少し変わったけれど、遠くから歩いてくるの見てすぐわかったわ」
藤野は肩にかけたバックをかけ直し、ちょうど雲の切れ目から差し込んだ陽射しに眩しそうに目を細めた。
「入る？」
僕がスタバの自動ドアに目をやると
「ううん。ここは待ち合わせ。わかりやすいからよく待ち合わせに使っちゃうの。あのね、行きたい喫茶店があるのよ」
と藤野は言った。
「じゃあ、そこに行こうか」
僕たちは天神の街を歩いた。藤野がほんの半歩くらい前を何もしゃべらずにさくさく歩くものだから、僕は店とか人とかごちゃごちゃした諸々をのんきに観察することができた。
土曜日の午後の天神というのは、恐ろしいほどの人出だ。店にも道にも人という人がひしめき合う。交差点の信号が変わるとまるでケースの中のビーズのように、さまざまな色の人々が混ざり合う。みんな自分の興味のあるものを見て、興味のあるものだけを手に取り、そしてまた興味のある店に向かって歩く。カップルは手をつなぎ、赤ん坊はベビーカーの中で眠り、女性は大きなショッピングバックを肩に颯爽と歩く。そのパワーはときには車の通行を妨害したりもするほどだ。ある意味幸せな光景だ。そうするとこの街の一員である僕もいま、誰かの目には幸せに映るのだろうか。
いつのまにか今泉まで歩き、へぇあんなところに美容室が入っているのかと見慣れないビルの上のほうをキョロキョロ眺めていると
「あ、こっち。ちょっと狭いんだけど」
と藤野が振り返って言った。褪せたビルとビルの隙間の、トタンの屋根がついているからか薄暗くて細い横道に入った。少し歩くと左側にオレンジ色の柔らかい明かりが見えた。
「ここ」
藤野がその明かりを指さし、ガラガラと古びたガラス戸を開けた。
その喫茶店でまず目に入ったのは、苔色の粘土をベタベタと塗り固めたような壁だった。対称的な白い木の棚の上には、器やグラスや絵はがきやハンカチやせっけんまでもが所狭しと並んでおり、どうやら売り物のようだった。あちこちに吊るされた小さな明かりやもっと小さな明かりがそれらをやさしく照らし、巨大なエアコンは水漏れするのか透明のプラスチックの受け皿がつけてあった。
ほんの何席かしかないけれど、椅子もテーブルもきちんと選んであることが伝わる。紺色の丸いソファにちょこんと腰かけて本を読んでいる女の子の足元を、でっぷりと太ったぶち猫がのそのそと通りすぎていった。
僕たちは少し表面が反り返った茶色い木のテーブルをはさんで向かい合ってすわった。なんだか一家で夕ご飯を食べるみたいだ。藤野はキャラメルミルクティーを選び、僕はチャイを注文した。
「甘党なのね」
と藤野が笑うので
「これって甘いんだ。飲んだことなくて」
と僕は言った。
たしかにチャイは甘かった。でも体に良さそうな味がしておいしか

った。気管に入ってむせる僕を見て藤野は笑い転げ、自分のおしぼりを差し出した。藤野の言う通りで、よく見るとやはり変わっているところもあった。眉毛はとてもキレイな形をしているし、目の下にはうっすらとクマがあるし、笑い方もやわらかくなったような気がする。そしてなにより女性の香りがした。僕は目の前の藤野を見て中学生の藤野を思い出し、その思い出と目の前の藤野とを比較することに静かに没頭した。アコースティックギターの懐かしい音色と女性の甘い歌声が流れた。

藤野はテーブルの隅の壁沿いに立て掛けてある鮮やかな色彩の本を手に取ってパラパラめくった。僕もしばらくは藤野を観察したり、店の中が物珍しくて本や器を手にとって眺めたりしていたけれど、そのうち飽きてしまった。藤野は本に夢中になってしまったようだった。僕から声をかけなければ藤野は僕の存在を忘れていつまでも本の中の世界から戻らないのでは、という不安に駆られたので

「あの、葉書のことなんだけど」

と、本題を切り出すことにした。ところが藤野はぴくりとも動かなかった。聞こえていないようだ。聞こえていないはずないんだけど、と

「藤野」とさっきより大きく呼ぶと、はっと顔をあげた。

「ごめんなさい。ちょっと……この本が面白くて」

藤野が読んでいた本はフランス語の絵本だった。藤野はフランス語がわかるんだ、と大学で習ったはずなのに読むことも話すことも忘れてしまった僕は感心した。

「なぁに」

「いや、その、例の葉書のことだよ。屋久島の登山地図の」

藤野はもう一度はっとして、

「やだ。そうだった」

と照れたように笑い

「私ったら、ひさしぶりの再会に感激しちゃって忘れてたわ」

と、バックの中から冊子のようなものを取り出した。

「これが地図」

たしかに「屋久島　宮之浦岳　完全登山マップ」と書いてあった。ご丁寧に「遭難者の捜索のときにもこの地図が使用されています」とまであった。

「私はもう、とりあえずしばらくは屋久島に行かないから、これは真木くんにあげます」

藤野はおどけて地図に両手を添えて、ずずっと僕の方に差し出した。僕は正直に話した。

「実は、僕はいまのところ屋久島に行く予定はないんだ。したがってこの地図がぜひ必要というわけでもないんだよ」

「え？」

藤野はぽかんと口をあけた。

「つまりね、突然、わざわざ葉書で、登山地図ありますって、なんだろうって。しかも、その、僕の記憶では中学でもそんなに仲良かったわけでもなく、卒業してからも一切連絡すら取り合ったことのない僕に、なんというか、この葉書はいったいなんだろうって」

最後のあたりはどぎまぎしていた。藤野は「なーんだぁ。どうりでタイミング良すぎると思ったのよねぇ」と笑いながら、

「私ね、つい二週間くらい前に屋久島に縄文杉を見に行ったのよ。仲間だけでガイドをつけないで登ったの。そのとき地図を買ったのよ。雑誌に必携って書いてあったから。八五〇円。ところが実際に登ってみるとほとんどがトロッコ道でルートは簡単だし、周りはガイド付きの団体で溢れかえっているしで使わなかったの。全く。出発前に眺めるくらいかな。なくても間違いなく登れるのよ。でもきっと初めての人は念のためにって買うでしょう？そんなの勿体ないじゃない。だからこの地図を使ってもらえたら、とひらめいて。それでも誰が行くかなんてわからないじゃない？屋久島ってそう簡単に行けるところでも

ないし。登山って好ききらいもあるし。それでみんなに葉書を送った
の」
「え、みんな？」
　僕は驚いて訊き返すと
「そう。住所がわかる人みんな。うちの母親、几帳面だからクラスと
か部活の住所録、きれいに取ってあったのよ」
と藤野は言った。それを聞いて、僕の驚きは軽い失望に変わった。
「ねぇ、屋久島ってすばらしいのよ」
　そんな僕に気づかず、藤野は目を輝かせてしゃべりだした。
「島の中心にどーんと山がそびえててね。島自体、三時間程度で一周
できちゃうくらい小さな島なんだけど、そのほとんどを山が占めてい
るの」
　藤野は地図をテーブルに広げた。海岸に沿ってぐるりと黄色い道路
の線がひかれていて、その輪の中は完全な緑だった。なるほど。これ
は島というより山と呼んだほうがいいかもしれない。
「朝四時に起きて顔だけ洗って着替えて民宿を出るの。登山口までは
車で行くんだけどもちろん真っ暗で、道は車一台しか通らないほど細
いしくねくね折れ曲がってるしすぐ下は崖みたいになってるし、すご
いスリルだったわ。そうして着いたら朝ゴハンのお弁当を食べて、空
が明るくなる六時すぎから登り始めるの。もうね、福岡とは大違い。
しんとしてひんやりしてて、上着があってもいいぐらい。空気が瑞々
しいのね。ただ歩いてるだけで化粧水をつけたみたいに肌がしっとり
して心地いいの。でもやっぱり夏なの。光を浴びた緑が鮮やかで。日
が高くなるにつれ木々が金色に光っていくのよ。すばらしいでしょう」
　藤野ってこんなにしゃべる人だったんだ、とあらためて藤野の顔を
まじまじと見た。藤野は思い出に陶酔しきっているかのような目で、
その目は僕を透かして屋久島を見ているようで、止まることなくしゃ
べり続けていた。

　藤野の後ろはカウンターになっていて、客は大きめの中年の男性が
一人だった。その奥がオープンキッチンで、ベージュのエプロンをつ
けた女性が手を動かしながら男性客の話し相手になっていた。
「メモリースティックをさぁ、入れる袋っていうのがなかなかないん
だよな。いろいろ探したけどどれも大きすぎるんだよ。五つぐらい入
るやつがいいな。チャックはいやなんだよ。紐でしゅっとしぼれるや
つがいいの。さっと開けてしゅっとしぼれるやつが。紐がついてたら
バックにもさげられるじゃない」
「それ巾着がいいんじゃないの？」
　女性が笑いながら言った。客は身を乗り出して
「そう。巾着だよ。でも大きいのは駄目なんだよ。ユキちゃん作って
よ」
「やーよ。忙しいのに」
　ユキちゃんはミキサーに何かをごろっと入れ、スイッチをかけた。
ガガッと砕けたあとブイーンと意外に静かな音がした。いいな、と思
った。
「真木くん、ラジオ体操って覚えてる？」
　藤野は覗きこむような目で僕を見ていた。僕は氷がとけたチャイを
一口飲んだ。
「いまここで最初から最後まで全部やるとなると難しそうだけど、あ
の音楽がかかれば体が勝手に動くと思うよ」
　藤野はうなずいた。
「あれって第一と第二があるじゃない？私、小学生の頃、たしか第二
の二番目にあるやつ。筋肉モリモリみたいな。あれがすごく恥ずかし
くて。私の小学校は週に一度、体育朝会っていうのがあったのよ。何
をするのかというと、児童全員運動場に出てラジオ体操をするんだけ
ど、私、体育委員だったからみんなの前でやらなきゃいけなかったの
ね。そして筋肉モリモリのときだけ極端に動きが小さくなってしぼん

だみたいになるの。それもまた恥ずかしいの。ところがトロッコ道を歩いている途中、どうしてもそれをしたくなって。私、筋肉モリモリしながら歩いたの」

「それは気持ちいいだろうね」

僕は言った。

「みんなもうらやましそうに見てたわ」

と藤野はニッコリ笑った。そしてふとグラスに目を落とし、少し神経質に両手をこねるように動かしながら言った。

「ねぇ、私、何かへんなことしゃべってないかしら」

へんではないけどお腹いっぱいだよと言うのをこらえて、

「そんなことないよ。すばらしいなぁと思いながら聞いていたよ」

と言った。藤野は軽く唇の両端をあげ、テーブルの木の筋を指でなぞった。

「私ね。あの森で何か、いままでになかったものを感じたのよ」

「いままでになかったもの？」

「そう。いままで経験したことのないもの。中学校にも高校にもなかったもの」

「たしかに森はなかったな。申し訳程度の貧相な学級園ならあったけど」

と僕は言った。

「ねぇ」

藤野がまじめな顔をして言った。

「真木君もぜひ行ってみて。そしてこの感覚が何なのか私に説明してほしいの。なんとなく感じて、そのままこっちに帰ってきちゃったものだから自分でよく理解できてないのよ。意味づけができないの」

お金が貯まったら行くよと言うと、絶対よと藤野は念を押し、腕時計を見た。

僕らは横道から出たところで別れた。地図は約束を忘れないようにと僕にくれた。じゃあねと笑って手を振り、藤野は左に歩いて行った。ぴんと伸びた後姿が気持ち良かった。肝心の縄文杉のことは全然聞かなかったなぁと帰りのバスの中で気づいた。

僕は翌週の四日間、長崎の実家に帰った。「盆も帰ってこん。誕生日祝いもしとらん」と母親が電話先でブツブツこぼし、確かに地元の友だちとも飲みたい、でも昼は何もすることないな、という苦悩の末生まれた数字が「四」だった。

さっそく帰った日の夜に高校のとき同じ塾で仲の良かった七人が集まり、そのメンバーでよく使う安い居酒屋に入った。平日のわりにはなかなか混んでいて、僕たちのような学生グループばかりだった。学生が飲みに行ける店といったら、この街では特に限られるから当然かもしれない。

「康介はまだバンドしてんの？」

熊本の大学に通っている一人が唐揚げを皿に取りながら訊いてきた。ここの唐揚げはきざんだ葱と甘酢がかけてあってうまい。

「やってるよ。たまにやりたいときに同じバンドの奴らに声かけて部室で弾くぐらいだけどね」

「ギターだっけ？」

「ギターもやるけど一応担当はベース」

「ストリートデビューはしないんだ」

「ちょっと種類が違うからな」

僕が入っているサークルはデスメタル研究会だった。

「但野は部活続けてるの？野球」

かわりに訊いた。

「もうさすがに引退だよ。就職試験の勉強も始めないといけないしな」

「もう？」

驚いた。まだ三年の夏だというのに。

「但野は何になるんだっけ？」
「俺？公務員」
「えぇ、おまえ法学部じゃないの？」
「そうだよ。だからって弁護士になれるはずもないやろう。公務員試験の方が司法試験よりは簡単で安全で安定してる。ただ倍率が高いけんね。就職浪人もいくらでも受けるだろうし」
「そういえばくぼやんも郵便局で働いてるって言ってたな」
と向かいの一人がビールを片手に僕たち二人の会話に入った。
「くぼやんって美容師になるんじゃなかったっけ」
「いやー、専門学校途中でやめたんよ。厳しかったみたい」
「わーもったいないなぁ」
但野が呼び出しのボタンを押して店員を呼び「ビール一杯とタコわさください」と言う。
「のりちゃんはどうすんの？」
東京の私立に通う彼はビールを飲み干し「あ、俺も頼んどけばよかったな」とボタンに手を伸ばして、
「一般企業」
と言った。
「銀行とか広告代理店とかホテルとか。先輩はエントリーシートだけなら五十社以上出したって言うんだよね。俺なんかいったい何十社受ければいいのかなって」
その答えは僕にはとても不思議だった。
「銀行とかホテルとかって、のりちゃん何でもいいわけ？」
彼は苦笑いしながら
「どれだけ落とされるかわからないからね。とりあえず良さそうなのをしらみつぶしに受ける」
そういうもんか、とやはりよくわからなかった。
「康介はどうすんの」
「俺は院に進むかなー」
僕は工学部の建築関係に通っていた。
「やっぱり大学院までいくといかないとでは就職も違ってくるわけ？」
「うーん、そうだなぁ」
他の四人は、さっきビールを持ってきた店員がかわいかった、おまえ次来たとき声かけろよ、やだよとはしゃいでいた。
「そういう会社もあるけどね。俺はもう少し専門的なこと勉強したいんだよね。いまは覚えることだらけであんまり面白くないんだけど、院の人たちは企業から請け負った研究とかやってさ。うん。面白そうなんだよな」
「進学かー。金かかるなぁ」
と但野は言った。
「免除とかないわけ？」
とのりちゃんは訊いて、豚足にしゃぶりついた
「あるよ。ところが一般教養の成績がまるでひどいんだ」
僕はサラダを皿に取り、レタスをむしゃむしゃと食べた。
僕らは授業の後もよくこのメンバーで残って受験勉強をした。一人は弁護士を志し、一人は薬剤師を目指した。模試のたびに胃が痛くなったり、苛々したり焦ったり、みんなそれぞれ必死だった。結果は志望校に受かって泣くほど喜んだ奴もいれば、立ち直れないほど落ち込み、浪人して同じ大学を受け直した奴もいた。あのとき必死に戦ったのはなんだったんだろうな。

福岡に戻った日に、ちょうどいいタイミングで藤野から電話があった。一緒に昼ご飯を食べようという誘いで、「あの喫茶店で会いましょう」とはきはきとした声で言った。
この日も藤野は髪を一つに結び、白のタンクトップに涼しそうな太めのカーキのパンツをはいていた。店は空いていて、カウンターにも

客はいなかった。僕はチキンカレー、藤野はきのこのサンドウィッチを頼んだ。
「ここのサンドウィッチってすごくおいしいの」
藤野はわざわざ注文した後にそう教えてくれた。
「二枚の食パンに具を挟んでね、それを食べやすいように斜めに半分に切ってあるんだけど、私はちょっとでも小さい方から食べるの。半分を食べ終わったあとに大きい方が残っているとうれしいでしょう。そしてチーズの塩辛さを緩和するために付け合わせのクレソンを一緒に食べるの。パンの耳に味をつけるためにピクルスを一緒に食べるの。チーズとピクルスを一緒に食べちゃダメなの。私は必ずこの食べ方をするの」
「いつも？」
「いつも。必ず」
藤野は真面目な顔をして肯いた。
「鑑賞も鑑賞するために鑑賞するの。映画を見に行くにも、必ずあらすじや評判をチェックしてから行くの。人間関係やストーリー構成を常に頭に置いて、難しいサスペンスとかは途中でこんがらがらないように、頭の中で少し遅れてわかりやすいストーリーに再構成するの。そうやって百パーセント理解したいの。布石を見抜いたときほど気持ちのいいものはないわね。そこに意義や教訓を見出すの」
僕はこのあいだ藤野が読んでいたフランス語で書かれた絵本を手に取り
「僕はただ読みたいからこの表紙をめくる。そして先を読みたいから次のページをめくる。読みたくなくなったら途中でも閉じる。何分後か何日後か、また読みたくなったらもう一度この本を手にするかもしれないし、永久に閉じたまま忘れてしまうかもしれない」
「うらやましいわ」
と藤野が言った。
「羨むことじゃないよ。君のほうが建設的で生産的だよ」
と僕は言った。
「でももう疲れたの」
藤野はさびしそうに笑った。
「きっと本当はアルマゲドンやプリティウーマンが好きなのよ」
カレーは辛くはなかったけれど骨付きのチキンがほろほろに柔らかくておいしかった。藤野は本当に説明どおりの手順でサンドウィッチを食べた。店を出ようとガラス戸をあけるとぶち猫がぬっと外に出てしまった。「あ、コラ」とユキちゃんではない店員が追いかけたが猫は意外にも素早かった。「まてー」と走っていく彼女を見てユキちゃんは「あーあ」と苦笑いしていた。
路地の薄い暗がりの中で藤野は静かに口を開いた。
「屋久島から帰ってきて、生まれて初めて街をブラブラしてみたの。そうしてこの喫茶店を見つけたの。これって運命だと思ったわ」
藤野は立ち止った。僕を見上げた。
「ねぇ、私、変わってしまうんじゃないかって、そう感じたのよ。あの森でも。帰ってきてからも」
顔が陰って表情がよく見えなかった。
僕は尋ねた。
「それは期待？それとも不安？」
「わからない」
藤野は首を振った。
それから僕らは夏休みの間ときどき喫茶店で会った。そのたびに藤野のしゃべる量は半端なく増えていった。
「ケータイのアラームで朝起きたらまず残りの二つのアラームを解除するの。もしも寝過ごしたときのためのやつね。テレビのニュースを

つけてケータイを充電してトイレに行ってお風呂場に入って顔を洗って、あ、洗顔フォームはきめ細かく泡立てないといけないの。それで顔を洗って髪も体もシャワーを浴びて。頭にタオルを巻いたまま化粧水つけたら乳液つけて下地つけてクマ消しのクリームの、オレンジとイエローを混ぜたやつを目の下にたたきつけて、さらにイエローだけをまたその上に重ねてファンデーションを塗ったところで洗濯するの」

「洗濯？僕はあまり詳しくないから自信なく言うけれど、君の化粧がそれで完成だとはとても思えないけれど」

「そう。ほんとはシャワーを浴びたところで、または起きてすぐしたいんだけど、万が一洗剤がついた手で顔を触りたくないでしょう。パジャマも洗いたいし。下着とかシャツとかを別々にネットに入れて洗剤とワイドハイターとハミングを入れたら全自動のボタンを押して、次にビューラーでまつ毛をカールするの。マスカラを塗って眉毛を描いてチークをたたいてブラウンのアイシャドウを軽くいれたらもう一度マスカラを重ねて、完了。やっと髪を乾かすの。ＨＯＴのあとにＣＯＯＬの風をあてたほうがいいんだって。キューティクル。ドライヤーのコードを巻いたら引出しにしまってパソコンをひらいて立ち上がっている間にヨーグルトに蜂蜜を混ぜて野菜ジュースをコップに注いでそれを食べたり飲んだりしながらメールをチェックするの。そうこうしてたら洗濯機のブザーが鳴るから干して歯を磨いて着替えて登校するの」

「朝からひと仕事だね」

と僕は言った。

「そうなの。ひと仕事なの」

藤野は顔をしかめて水を一口飲んだ。

「それに眉毛がいつも通りに描けないと、Ｔシャツの両肩を留める洗濯バサミは同じ色でないと、上から下に書いてあるプリントは上を上にしてバックに入れないと一日中不安になるの」

「僕は今朝三十分寝坊して二日酔いで何も食べられなくて、洗濯は週に一回しかしないし、鞄の中のレポートは折れ曲がったりもしてるけど、そこそこ平和だよ」

と僕は言った。

「いいわね、あなたは」

藤野は小さくため息をついた。

ある日、実はあの子は誰だれを好きだったとか、なんとか先生はいつもいやらしい目で女子のスコートを見ていたとかいう話で盛り上がったとき、ふと藤野が言った。

「私、よく真木くんの試合見てたのよ」

「え、あんなヘタクソな？」

僕は少し恥ずかしくなった。藤野は笑って

「上手だなと思って見てたのよ。きちんと相手を見て高さや距離を計算してた。ロブなんてすばらしかったわ。私なんか反対側に打ち込まれたのを必死に追いかけてなんとか打ち返したときの時間稼ぎなのに、あんなに相手の前衛の頭すれすれに打つなんて、まるで攻撃なんだもの。でもいつもペアの子が狙われてミスをして負けていた」

藤野は僕の目をじっと見て、黙り込んでしまった。僕は隣の椅子に丸くなって寝ているぶち猫の毛をそっとなでた。

「僕たち男子は女子と違って誰と組んでも良かったんだ。顧問も練習を見にはほとんど来なかったしね。僕のペアはたしかにうまくはなかったけれど、一番気が合ったんだよ。バックもうまく打てないのにテニスの雑誌買って試合の作戦をあれこれ練ったりさ。あいつと組むと楽しかった」

藤野はふっと力が抜けたみたいにテーブルに置いていた手を下ろし

「わたしもそういうテニスをしたかったわ」

と言って付け足すように少しだけ笑った。

夏休みの終わりにさしかかって、例の喫茶店にはじめてひとりでぶらりと訪れた。

とても混んでいてカウンターもいっぱいだった。どうやら席はそこしか空いていなかったので、僕は最初に藤野と来たときと同じ四人掛けの席にすわった。注文して新しくテーブルに置いてあった内田百閒の「ノラや」を読んでいると、ユキちゃんがアイスコーヒーを持ってきた。

「猫が好きで、ついお店にも猫グッズを置いてしまうのよ」

とユキちゃんは笑った。たしかに置物も時計もそうだし、本も表紙が猫の絵のものばかりだった。面白いのはマトリョーショカで、決してかわいくはない、そして小さくなるほど雑に描かれたひょうたん型の猫が四ひき並んでいた。

藤野が前に読んでいた絵本にも、よく見ると猫が描かれていた。僕がそれを手に取ると

「ねぇ、よく一緒に来てくれる女の子。あの子、何ヵ国語か話せるのかしら」

とユキちゃんが尋ねた。僕はあまりに予想外の質問に

「うーん。どうなんですかねぇ。そういう話はしたことがないですけど」

と首をひねった。ユキちゃんはちょっと難しそうな顔をした。

「どうしてですか」

僕が尋ねるとユキちゃんは言った。

「うちの店にはね、いろんな国の本を置いているのよ。友だちが本屋に勤めてて、私が好きそうな色のキレイな本とか猫の本とかを紹介してくれるわけ。それをあの子、片っ端から手に取って読んでるみたいなのよね」

「絵が気に入って眺めてるんじゃないんですかね」

僕が何の気なしにそう言うと

「絵の入っていない本は？」

と、彼女は冷静に言った。

「英語もドイツ語もフランス語もスペイン語も、絵の入っていない文庫本も全部手に取って読んでいるのよ。しかも二時間以上かけて。ところがあるときから気になってちらちら見てみると、どうやら全然ページが進んでないみたいなの。ほんの最初のあたりで止まっちゃってるのよ。あれって読んでいるのかしら」

ユキちゃんは心配そうな目で僕を見た。僕は何も言えずに首を振った。

とうとう後期が始まった。十月とはいっても昼間はやはり日差しが強く背中にうっすらと汗がにじむほどで、それでも女の子たちはニットやブーツなどで秋を装っていた。同じ科の恋人とはすれちがっても無視された。

二限の授業が終わって講義室を出てすぐケータイを見ると、藤野から着信が入っていた。

かけ直したがしばらく出なかった。留守番電話になった。メッセージを残さずに切ったものの、気になったのでもう一度かけてみた。やはり呼び出し音が鳴り続けるばかりで、そろそろ留守電につながるかと諦めたときに相手が出た。何も聞こえなかった。

「藤野？」

何も答えなかった。

「藤野」

もぞもぞと声のような音がした。

「え、なに。聞こえない」

僕は受話口に耳を押しあてた。

「落としたの」
低く押し殺したような声だった。
「は？なにを？」
財布？いくら。カードは止めたほうがいいのだろうか、と先走って混乱していると、
「……単位」
と藤野は言った。
「え。前期の？」
あんなによくしゃべっていた藤野も大学の話だけはほとんどしなかった。だから学部が教育ということしか知らなかったし、専門教科が何かも全く知らない。僕の大学生活について聞くこともなかった。僕が勘違いしてレポートを一日遅れて提出してしまい、教授に冷たくあしらわれて落ち込んだ日には、「大丈夫よ」と笑ってかき氷をおごってくれた。
「今朝、おいそぎにしたからよ」
藤野は震えていた。
「おいそぎ？」
僕は訊き返した。
「今朝は時間がなかったの。それで洗濯を〝おいそぎ〟にしたの。〝標準〟よりも十五分早く終わるのよ。洗濯しないよりは、と思ってついおいそぎにしたの。だからこんなことが起こったのよ」
ひっくとしゃくりあげる声がして、ポロポロと涙を溢れさせている藤野を感じた。
「あのときもそうだった。あの日、私はいつものシャープペンを使わなかった。なぜなら鉛筆を使わなければならないとか言われたから。でも私はずっとあのシャープペンを使ってきた。思いも力も一心に込められていたのに。迷った挙句、私は買ったばかりの鉛筆を使った。だから志望校に落ちたんだ」
藤野は声をあげて泣き出した。
また来年再履で取ればいいじゃない、とは僕は言えなかった。なんだか藤野はそうではないところで、もっと遠い遠い場所で、苦しんでいるように思えたからだ。

その電話以降、藤野からの連絡は途絶えた。僕は何度も電話したけれどいつも留守電だった。藤野と同じ大学の子や仲のよい友達を知らないので詳しくはわからなかったけれど、噂ではどうやら大学をやめたようだった。
僕はそれからも喫茶店に通った。藤野と会うことはなかった。ときどきサンドウィッチを食べた。そのうちユキちゃんではないほうの店員ととても仲良くなった。けれど「あなたの〝好き〟はよくわからない」と言われてからは気まずくなって、喫茶店にも行きづらくなってしまった。

いつのまにかまた目を閉じていた。僕は再び上体をかがめ、さっき押し込んだリュックを引っ張り出した。ファスナーをあけ、手を突っ込み取り出す。五年前に譲り受けた登山地図だ。アナウンスで脅されたほど機体が揺れることもなく、窓から外を見ると雨すら止んでしまったようだった。地上には鹿児島の街がひろがっている。今夜は市内に一泊して、明日朝一番の高速船で屋久島に行こう。あさっては縄文杉だ。僕は地図をひらいた。そこには先日届いた葉書を半分に折ってはさんでいた。

屋久島に行く予定のある方、連絡ください。
民宿やってます。

藤野ゆかり

０９０－××××－××××

僕はあのときの葉書を思い出しながら、変わり映えのない文面だなぁとちょっと笑って、再びリュックにしまった。

（大学院教育学研究科二年）

第一回東光原文学賞優秀賞受賞作品

カラー・クイーン

折朽平良

１．キラー・クイーン

1

熱で炙られた金属片は、色合いを変えていく。初めは赤く、やがて朱く、最後には白くなった、その時。

携帯の電源を切り忘れたのが悔やまれる。ポケットの中の振動に一瞬気を取られた隙に過熱された実験試料は溶けて、ほとり、と落ちた。これで、現金にして数万円、加えて　実験の準備に費やした多大な時間が、灰塵に帰したのだ。

装置を切り、まだ止まない着信と画面に表示された名に舌を打ちながらも、受話した。

「赤間？」

訊かなくても、自分が誰にコールしたかぐらい、わかっているだろう。いつになく慎重な切り出しなのは、今夜、俺が実験をしていると知っているからだ。

「なんだ？」俺が言った。

「ごめん。少し、こっちでもめてて」

携帯を片手に頭を下げる彼女が見えるような気がした。電話の奥では怒鳴りあう声が聞こえていた。

「すぐ行く」

「ごめん、ありがとう」

また頭を下げたな、と想像する。返事をせずに通話を終え、誰もい

ない実験室を消灯した。駆け出そうと思っていたら、真っ暗になった実験室を出るとき、椅子に足を引っかけて盛大に転んでしまった。携帯を取り出し、バックライトで周囲を確認しながら今度こそ実験室を後にした。うっかり触ったパネルのせいで、ここ最近の着信履歴が目に入った。広さと鮮やかさが自慢の画面は、いい加減見たくもない名前――菱井　南――でごっそり埋まっていた。さっきのも、しっかり残っている。

なにもかも、あの女が悪いのだ。

痛みの残る左足をさすりながら、そう思った。

2

キラー・クイーンという曲がある。

イングランドの名バンド、クイーンのものだ。「魅力たっぷりの彼女は、あなたの心奪うこと請け合い」という内容で、曲全体の、不思議に上品な雰囲気がいつまでも心に残る一曲だ。

実験棟を出てから呼ばれた現場まで歩く。暦は十月に入っているが、夏が居座っているような、しぶとい暑さがまとわりついた。このキャンパスが、いく夏を惜しんでいるのかもしれない。

ここは、西見山科学大学。俺は、その第三学年にあった。そして、この学科最後の学生でもある。二年以内の理系学科閉鎖が決まっていて、あらかたの研究室は、よその大学へ移っていくか、路頭に迷うかしていた。

明日、この学科最後の学園祭がある。

この春　菱井に連れ込まれて以来、俺は、ガラにもなく実行委員なるものをやらされていた。ポストは、副委員長。責任はあるが権限はない、という典型的中間管理職で、いつも雑多な用事で呼び出されている。今夜もそうだった。

実行委員会にあてがわれている部屋は学生棟の二階にあり、ろくろく掃除もされていない埃っぽい廊下をしばらく歩けば　開け放たれた扉から明りが漏れているのが見える。ここ数日は寝ずの作業が続いており、いつ来てみても必ず誰かが仕事をしていた。この半年の大詰めだった。

学生棟に近づいた辺りで聞こえ始めた怒鳴り声は、部屋に入ると破壊力を増した感じだった。階下の自販機で買ってきた缶ジュースを四本両手で支えていたが、振動が缶にまで伝わっている。

怒鳴りあっている二人は、軽音楽部の高橋と翻訳サークルの女だった。彼女の名前は知らない。

「でも、これじゃあ意味が伝わらないだろ！」

高橋が怒鳴っていた。背が高く、がっちりと筋肉質な彼は、もともとクラシック畑の人間で、ピアノは相当の才能だったらしい。そんな高橋は、なにをトチ狂ったかポップスに目覚めてしまい、勘当同然でこの大学に通っている。クイーンのコピーバンドを率いつつ、ピアノ兼ヴォーカリストとしてどうにか食いつなぐ日々だ。

クイーンが大好きだった俺は、高橋とは大学で会うなり馬が合った。以来ライブには何度も行ったし、入学からの交友は今でも続いている。

「いえ、文法的には……」

もめた理由が知れた。詞のメッセージ性を重視する高橋には、彼女の硬さが煩わしい。彼は苛烈なタイプに属する天才で、しかも、その苛立ちには、他の要因も重なっていた。

今年の学園祭は、いつもと違う。誰も彼もが、焦燥の中にあった。夏の終わりに大口のスポンサが撤退し、予算が例年の半分近くまで減ったのだ。故に、高橋のバンドである「カラー・クイーン」をメインイベンタとし、学生のみで全てを盛り上げることになった。

予算を聞いたときには流石にスタッフ全員の顔が引きつったが、菱井は違った。

「こっちの方が、最後にふさわしいじゃない。だいたい、学園祭なんだから、本来私たちだけでやるべきなのよ。やりがいがある、と思いましょう」

演技か地か、彼女にはいつも自信が溢れているように見える。菱井が言うと、なんとなくできそうな気がしてくるのだ。リーダーに必要なのは、ついて行きたいと思わせる器。彼女はそれを持っていた。かく言う俺も、その器量に引っ張り込まれたクチである。

だが、その一方で彼女の魅力は危険な側面も持ち合わせていた。菱井の導きは、スタッフに理想を抱かせる。その、各々の理想が知らず衝突を生むのだが、その点、俺は異なった。俺には、理想がない。いつだって、展開された局面を洞察し　最適の対処を行う――、行ってきた、この半年間。その一点でのみ、俺は、このチームに所属する存在意義がある。つまり、理想のないことが、理想的なポジション。

両手の缶を打ち鳴らして、こちらに注意を引く。

で、言った。

「まぁ、飯でも喰おうや」

いつもと同じように、彼らに見えない角度で菱井が顎を少し引いた。高橋たちに反論の暇も与えず、彼女はもう、ピザ屋に電話をかけている。

こんな調子で、この半年は、瞬く間に過ぎた。

どこまでも強引な女。退くことを知らない魂。

梅が終わり、桜が開こうとしていた、三月。

そう、あの日も俺は、実験室にいたのだ。

3

同じ学科に妙な女がいるという話は聞いていた。

入学後の二年間狂ったように勉強していたかと思ったら、三年になった途端に休学届けを出し、単身、インドへ放浪の旅に発ったそうなのだ。それが、今年戻ってきて復学するという話だった。

必修科目の最初の授業でそうした噂を聞いていながら、俺は気にも留めなかった。ひとまず、インドよりも集中したい事柄があったからだ。実験棟に移動し、借り受けている鍵で実験室に入る。

今、自分は、物性の研究をしている。巡り会わせとは不思議なもので、高校の頃から物理は好きだったが、正直に言えば、物性なんぞに興味はなかった。物性とはモノの性質を調べる学問。対して高校の頃の自分は、むしろ複雑系……ロボット・飛行機といったものの設計をしてみたかった。

望む道をどうして進まなかったかと言えば、単純な理由である。落ちたのだ。現役生として国立を受験したとき、どこで間違ったか、あっさりと不合格になってしまった。一度の不合格で急に弱気になった俺は工学の道を諦め、センター試験のマークも恐くなり、二次一発勝負で解決する私大を選んだ。

「お前は後悔していないのか？」、「アンタ、このままでどうするのよ？」と、レベルの低い私大に行っていることで帰省するたびに尋問されるが、残念ながら、そこまで強い感情は湧いてはこなかった。あのまま落ち続けていたら、こんな言葉では済まなかったはずだ。それに、真面目にやっている俺に物性研の本村教授は目をかけてくれて、三年の身でありながら実験までさせてもらっている。なんの不服があろう。

試料にそれぞれ番号をふり、順番に並べていく。実験は、段取りが全てだ。ここをいい加減にしたら、得られたデータも怪しいものになる。昔からケアレスミスの多い性分であったために、俺は、自分のことをまったく信用していない。

いや、実際、ここまで考えているのにミスをするのだから、笑えてくる。さあ始めようかと思ったところで背中から声がかかった。

「頑張ってるね、青年」

初耳の、女の声だった。女性のスタッフはいないから、本村研の人間ではなさそうだ。振り向けばわかるかとも考えたが、振り向いたところで、やはり、わからなかった。少なくとも、人を「青年」と呼び捨てにできるほどの親しさでないことは明らかだ。初対面なのだから。

「誰？」

これが、インドの女、菱井南と初めて交わした言葉だった。実験室に鍵をかけ忘れた自分に苛立っていたとはいえ、随分な言葉だったと反省している。

細っこい体に小さな頭をのせた、背の高い女だった。あちこち見ているのか、よく動く目が利発に思えた。髪が短かったために、この距離で見てもアルファベットの「アイ」に見える。

「あたし？」

彼女は首をかしげた。お前以外に誰がいるんだ？

「菱井、南と言います。ヒシはダイヤの菱に、イは井戸の井。ミナミはサウスの南、ね」

菱井は瞳を大きくし、わかった？　と言わんばかりにこちらを覗き込んでいた。俺は座っていたから、必然的に見下ろされる形となった。

「で、その菱井さんが何の用？」

静かに彼女は顔をしかめた。二人でいるには広すぎる実験室を目だけできょろきょろと見回していた。忙しい人間だと、観察される。

「失礼だな、キミは」

こちらが名乗らないことを言っているのだろう。お前に言われたくはないと思ったが、しかし、致命的に不愉快にさせられたわけでもない。あとで無礼者呼ばわりされるのも癪だ。

「赤間悟」

漢字も説明しなければならないか、と考え、躊躇したが、菱井が左手をあげて制した。レフティーだろうか。

「レッド・ルーム、リアライズ。知っているから、そこまでしてもらうには及ばない。要するに、キミが名乗ろうとするかどうかが大事なことだよね。他人と友好的になろうと思ったら、自分にその意思があることを見せないと」

別に俺はお前と友好的になりたかったわけではないと思ったが、そのまま言わせておいた。

菱井はゆっくりと大またで歩いた。淡い、春色のワンピースが揺れた。カツ、カツと、踵が床を叩く音がしていた。テンポ六十のメトロノームみたいだった。

視界の向こう側にある窓の方に行って、菱井は外を見ている。実験用の大きな机があるので、彼女の背中が上半分だけ見えていた。その場でくるっと回転し、素早くこちらを向く。眼球同様、身のこなしも軽いようだ。

「で、どうかね。私と一緒に学園祭をやらないか？」

強盗でも提案されているように聞こえた。

「なんだって？」

「だから、私は、学園祭の実行委員をやりたいわけ」

それは、お前の自由だ。俺の自由ではない。

「やればいい。好きなだけ」

菱井はこちらに戻ってきて、さらに大きく二歩、近づいた。すぅっと、自分の名を説明したときよりも更に澄んだ感じで、彼女は俺を覗き込んだ。彼女の目は、限りなく子どもに近かった。だがそれは、子どもの、ちりばめられた輝きではなかった。菱井の瞳は、光りが一点に集中した、濃度の濃い、独立した鮮やかさだった。寒気がした。「お前、本当にはやりたいことがないのだろう？」と恫喝されているように思えた。

「少し、考えさせてくれ」

と、俺は言い、しかし、何も考えていないのは明らかだった。彼女は軽く微笑んで引き下がったが、恐らく、俺が受諾するものと判断し

たから帰ったのだ。去り際、「やりたいことは、手当たり次第にやることにしているの」と彼女は笑った。翌日俺は彼女のもとへ行き、本年度のスタッフ第一号となった。

学園祭の実行委員は、この後、一週間で選定が終わった。この、一週間というタイムは歴代でも奇跡的なスピードだったらしい。何度か一緒にスカウトに行ったが、暇を持て余した学生相手ということを差し引いても、彼女の交渉は的確だった。スタッフの招集が終わる頃には、俺は、畏怖と賞賛を込めて、心の中でだけ、彼女をキラー・クイーンと呼ぶようになった。

ときどき思う。

あの鍵をかけ忘れていなかったら、どうなっていたか、と。

けれども、考えついたその都度、数秒で吹き出してしまう。無意味な仮定だ。菱井は、本当に必要なものに対しては、容赦ない。

キラー・クイーン。

実験室の扉なんぞで、あの女を防げるものか。

2. ボヘミアン・ラブソディ

1

ボヘミアン・ラブソディ。

クイーンについて語るとき、この曲を外すことはできない。この曲のストーリィは、生死を考えさせる。

ある少年が衝動的に人を殺し、死刑になる過程のストーリィなのだが、人生において衝撃的な出来事が起きた直後の諦め、現実の受容に伴う驚き・怒り・恐怖、そして完全に受容した後の悟り、という感情の動きを表現した一曲だ。僅か五分の間に映画になりうるストーリィを詰め込む能力は、クイーンの白眉であろう。

さて、俺たちの学園祭について語るとき、西脇社長の死を外すことはできない。彼は毎年学園祭のメインスポンサで、地元に展開するスーパー見山の主だった。残念ながら、俺は最後まで彼に会うことがなかったために、生前の彼を詳しく話すことはできない。

委員会が結成されて三ヶ月、ブラウスにジーンズというあっさりした格好の菱井は、キャンパス中を飛び回っていた。学園祭全体の流れも固まり、種々のイベントも決まり始めた七月、俺は、菱井に書類作りを頼まれた。それが酷い量だったので、担当者――もう一人の副委員長だ――はどうしたんだと尋ねたら、別件のために今夜はどうしてもできないのだ、と告げられた。

受けた仕事には責任を持たなくてはならない。夜の学生棟で、俺は、デスクトップに向かっていた。午後十時を過ぎ、流石に腹が減った。冷蔵庫に何かないかと思ったが、ミネラルウォータが一本あるだけだった。キャップに菱井の名が書かれていた。インスタント食品の棚も同様で、この頃多くなってきた徹夜仕事が食糧不足を招いたのだな、と思った。インスタントのリゾットが一つあったが、これにも菱井の名があった。パッケージに映る魚介が恨めしい。青のサインペンで大きく「食べるな！」と書いてあった。出前を取ることにした。馴染みの店に親子丼を頼み、再びディスプレイに戻った。

携帯が鳴った。菱井からだった。

「赤間君、いま、どこ？」

声が違う。今夜俺が代わってやった仕事の、本来の担当者だった。

「学生棟。どうして？」

電話を通してほっと息を吐くのが聞こえた。

「あの、菱井さんが飲みすぎてしまって、歩けないの」

「菱井が？　なんでまた」

「西脇さん」

そうか。スポンサーの機嫌取りに行って、たらふく飲まされたわけ

だ。
「場所は？」
大学の近くだった。
「すぐ行く」
机の上に伝言と料金を残して出た。最近、電話の最後はこのセリフばかりだ。菱井には三交代制を提案しよう。

2

酷い有様だった。菱井はドロドロに酔っ払っていて、飲み屋の玄関口にもたれかかり、腰を落としていた。午前中のジーンズ姿ではなく、大小の水玉模様が生地を埋め尽くしたような、暗い色のワンピースを着ていた。首に金色のチェーンが見えて、胸元にはそれに繋がれた同色の指輪があった。電話をしてきた副委員長は隣で事情を説明していたが、ほとんど頭に入ってこなかった。
タクシーが到着し、俺は菱井に肩を貸して慎重に持ち上げた。意識の定まらない菱井は両手を俺の首に回し、体重のほとんどをかけてきていた。車の傍まで見送りに来た女に菱井の家を訪ねたが、知らなかった。謎多きことである。仕方がないので学生棟で眠らせることにし、その旨告げて、女とは別れた。
料金の領収書を貰って、車を降りた。半分眠っているような菱井は、完全にこちらにくっついていた。左肩に彼女の胸が当たっていて、後で苦情でも言われたら嫌だな、と微かに思ったが、しかし、覚えているはずはないだろうと考え直した。とにかく、引きずるようにして黙々と彼女を運んだ。階段が大変だった。
委員会の部屋に着き、彼女をソファに横たえた。テーブルに置いてあるお釣りを確認していたら、半開きにした目で、菱井がこちらを見ていた。のっそりと右手を挙げて親指を立てる。ターミネーターのラストみたいだった。あのシーンと同じくらいゆっくり腕を下ろし、眠った。俺は、冷え切った親子丼を食べた。伝言を書いておいた紙に、ボールペンで「がんばってねぇ」と返事があった。素晴らしい出前だった。
そして、寝た。

3

「ああ、なにもかも気持ち悪い」
そう、菱井が呟いたので目が覚めた。凶暴な朝日が部屋の中に突入していて、眩しそうにしながら彼女は額に手を当てていた。寝ぼけているのか、自分以外の人間がいるというのに右足で左足の甲を掻いていた。まったく、キレイなお嬢さんだ。
「冷蔵庫」菱井が言った。
俺は机を離れて昨日見かけた水を彼女に手渡した。既にキャップは外しておいた。多分、ペットボトルを開けるだけの力は、今の菱井にはない。
「いつも、こんなことを？」
俺が言った。
彼女は、弱弱しく頭を振る。水がこぼれて菱井の首筋を伝っていった。
「なんで、スカートなんだ？」
彼女がぼんやりしていて、黙っているのもいたたまれず、訊いた。彼女のスカート姿を見るのは春以来だった。
「そろそろ、本気を出そうかと思って」
つまり、スポンサーを仕留めにいったということか。実際、西脇氏は、この学園祭の勝負どころだ。
「ああ、頭が痛い」菱井は顔をしかめている。「これで何も貰えなかったら、大損ね」
俺はまさかと思ったが、彼女は気づいていたのかもしれない。悪夢

の飲み会から一月もしないうちに西脇氏は肝癌で亡くなった。そして、スポンサードの話も、火葬とともに消え去った。

4

久々の実家は、冷え切って見えた。西脇氏の葬式のために背広を取りにきたのだ。

「お兄ちゃん、物理って楽しい？」

玄関口に腰掛けていると、リビングにいた妹が声を掛けてきた。彼女は美容師になろうとしていて、高校の卒業以来その道に就いている。大学に行かないと妹が言い出したとき、両親は彼女と激しくやりあった。だが、今となっては手に職をつけつつある彼女に、むしろ、目を細めている父母である。会うたび文句を言われるようなったのは、俺の方だった。

「楽しいよ」

背を向けたまま答えた。「楽しかったよ」が、正確な答えだった。

「あれってさぁ、なにか、意味があるのかな？」

「ドライヤーは、物理の産物」

まともに会話をするつもりはなかった。彼女が大学へ行くのを拒んだ頃に起因して、俺と彼女の関係は歪み始めた。かつて自分が冷遇された仕返しをするのに、憎まれ口くらいなら悪くない。それくらいは、受け止めてやろう。

「でも、お兄ちゃんのやってる実験なんて、もう他の人が結論を出してるんでしょう？　なら、お兄ちゃんにとって、なんの意味があるの？

私のはさみは誰かを綺麗にするけど、お兄ちゃんの実験は、なんの役に立つっていうの？」

俺は、ゆっくりと靴紐を結んでいた。背広に合わせる革靴なんて、ここ数年履いていない。調整には時間がいった。

立ち上がり、後ろを向くと彼女は机に突っ伏していた。寝る前の暇つぶしに言っていたらしい。見れば、エアコンの冷風が直接当たっている。

このまま葬式に向かうとしよう。彼女は頭を冷やした方がいい。風邪でもひけば、誰かがきっと、氷嚢を当ててくれる。

5

駐輪して斎場の玄関へ回っていったら、菱井が片手を挙げ、ここだ、と示した。彼女の隣にはもう一人の副委員長もいて、こちらはすでに涙ぐんでいた。

型どおりに式は進んだが、副委員長の女はただただ泣いていた。菱井は、眉間に強く皺を寄せながら時々彼女を見ては、唇を噛んでいた。

式が終わり、二人だけになった。副委員長の女はケロッとした顔で違う方向へ帰っていった。菱井は深く息をついて、タクシー乗り場へ歩いていく。大学へ戻る、と彼女は告げた。

「なにもかも気持ち悪い」

なんの気なしに言ったであろう、あの朝の言葉が、追いかけなければならないような気にさせた。自転車はそのままだったが、タクシーで大学までつきあうことにした。乗り場は混んでいた。

飲み物を買って戻ったら、菱井は、玄関の前に張り出した屋根の下で、太い柱にもたれかかっていた。そのまま滑り落ちてしまいそうに見えて、俺は、慌てて駆け寄った。

「どうした？」

二人の周囲を、全身を黒くした人々が流れるように出て行った。菱井は、それからも目を逸らしていた。俯いたままの彼女は、俺の手から紅茶を右手で奪って飲んだ。

「彼女、西脇氏と知り合いだったのか？　酷く、泣いていた」

菱井は、頭を振った。

「いいえ。あの子は……自分が泣きたいから、泣いたんじゃない？」

「そりゃ、泣いてたんだから、そうだろう」
「そういうことを言ってるんじゃないの」彼女はまた、頭を振る。「お葬式は、亡くなった人のためにあるものじゃないんだなって、そう、思っただけ」
「え？」
「質問の答え」彼女は呟いた。「気にしないでいい。多分、あたしが、間違ってる」
タクシーの中では、それこそまったく話さなかった。深く、静かな呼吸の中に彼女はいて、タクシーの運転手も、俺をも、完全に排除していた。
葬式に行くのに、機嫌がよくなる人間はいない。俺は、このときの彼女を、そんな風に思っていた。

6

大学から実家に戻ると、妹はもういなかった。母親が言うには、あの後遊びに出たらしい。風邪をひかずにすんだのなら、なによりだ。
どうしてか、ボヘミアン・ラブソディを聞きたくなった。父親の部屋に入り、レコードに針を落とした。ジジッという音の後にピアノが聞こえ始め、「ママ、僕は人を殺したんだ」という最初の歌声が部屋に満ちる。この曲の出だしは静かだ。空気感に浸っていたら、妹の声が聞こえた。
「で、それがわかったからって、なんの意味があるの？」
ここに彼女がいるわけではない、ということはわかっていた。
曲は、進む。中盤のやや激しい部分に移る。この後クライマックスを迎え、静かに曲は終わる。
彼女の問いに、俺は、答えることができない。
物性が嫌いなわけじゃない。だが、自分の将来にほぼ影響しないであろう実験をする意味は、どこにある？
ボヘミアン・ラブソディのラストは、「別になんてことはないさ、どの道、風は吹く」というものだ。西脇氏の死も、なんてことはないものだったのだろうか。風が吹き、舞い上げられただけの枯葉だったのか。ならば、彼のそれなりに長かった人生はどうなる？　人生の最後に大病を患い、挙句、出せもしない資金をエサに菱井を泥酔させた。
彼の人生は、なんてことのないものだったか？　多分、そうだろう。俺は、吐き捨てるように思った。
もう一つ、言えることがある。彼と俺の人生の違いは、せいぜい、泥酔した菱井に対して誠実であったかどうかという程度のことだ。
俺の人生は、なんてことのないものだろうか？　多分、そうだろう。望むと望まざるとに関わらず、ただ、舞い上げられる朽ち葉。
玄関口に行ったら、食事をしていかないかと誘われた。仕事があるからと断って、俺は、外へ出た。
当面やるべきことは、学生棟の中にある。しかし、それに意味があるのかと問われたら……。
俺は、答えることができない。

3、アンダ・プレッシャ

1

「輝ける七つの海」、という曲をご存知だろうか？　クイーンの楽曲の中でも屈指の疾走感を持つ名曲なのだが、この曲には冒頭、素早いピアノ・ソロが存在する。カラー・クイーンでは、高橋のパートだ。
さて、ピッツア・マルガリータのお陰か、歌詞騒動は一応の決着を見た。明日の夕方からのライブではステージ後方に表示する予定である。
明朝にスピーチを控えた菱井は、珍しく日付が変わる前に帰ってい

った。コーラをラッパ飲みしながら、ゆうゆう部屋を出て行った。雑用係の俺は少しばかり遅くなり、帰宅しようと階段に向かっていたら、誰かが暴れている音が聞こえてきた。嫌な夜だ。

音源に気づいた。学生棟の二階には、軽音楽部の部室がある。そのドアが開いていて、中から凄まじい破壊音が棟内に響いていた。開け放たれたドアを外からノックすると、はっとしたように高橋がこちらを見た。驚き、躊躇い、そして、落胆の表情を見せた。彼の足元にはバーボンのボトルが転がっている。あれから一人で飲んだのだろうか。

俺を見た高橋は、ため息をつくようにして笑った。そして、完璧に磨き上げられたピアノに向かって、弾いた。輝ける七つの海だった。……だが、彼にしてみれば難しくないはずのフレーズで、あっさりとつまずいた。高橋は、さっきと同じような笑い方をした。

「うごかねぇんだよ、指が。どうしても」

いつもの口調ですらなかった。どうしようもなく退廃的で邪悪な感じがした。彼は立ち上がって、飲みかけだったバーボンを部屋の端へ投げつけた。耳を切り裂くような音と、きらめきながら砕け散るボトルが見えた。部屋に、むっとしたアルコールの臭気が漂った。

「畜生、いつもこうだ」

高橋が言った。彼はすぐに窓を開けて、淀んだ空気を外へ逃がした。暗い夜の空気が、部屋に染みこんできた。少し、寒くなった。名門音楽一家に生まれた彼がどうして挫折することになったのか、わかった気がした。あれだけ部屋を荒らしているのに、ピアノにだけは傷一つついていない。呪われているのだな、と思った。

コーラのペットボトルが床に置いてあった。彼女のサインが見えた。

「菱井が来たのか？」

どうしてか気になり、訊いた。高橋は演奏を止め、こちらを向いた。質問には答えなかった。

「お前、変わったな」

「そうかな？」

何のことかわからず、左脳の隅で十秒ほど考えた。確かに、半年前とは比べ物にならないくらい、人と接している。

「そうだな」答えた。

「帰ってくれ」高橋が言った。「帰れ」

彼をメインイベンタにしたのは、俺だった。こんなに彼を苦しめるのなら、いっそ、祭りそのものを取りやめるべきだったのではないかとさえ、思えた。

棟の出口へ向かう途中で、再びイントロが聞こえ始めた。何度となくつっかえた。だんだん叩きつけるようになってくるから、俺にはそれが、囚人の揺する鉄格子のように聞こえた。

階段を下りたら、一人の女とすれ違った。高橋のバンドにいる、凄腕のベーシストだ。ライブ中、常に大きなヘッドフォンをつけ、げっそりと痩せた体に眼鏡をかけて、恐ろしく正確なベースを弾く。以前ライブで聴いたときには その「正しさ」に鳥肌が立ったものの、一方で、盛り上がりに欠ける才能だと感じた。人を楽しませる才能と、正確に弾きこなす能力は、まったく別種だ。

学生棟を出る頃には、高橋のピアノはぴたりと治まっていた。彼が来訪を期待していたのは彼女だったのだと思った。

2

祭りの当日、夕方以降の天気を気にして菱井はイライラと電話をかけ続けていた。何度かけても予報は変わらない。ライブに重なって、厳しい風雨が予想されていた。こうなってくると、委員会でも意見が割れ始めてくる。大学側から中止の要望もあった。

菱井がこれほど短気だとは思わなかった。

もう一人の副委員長が大学側につき、スタッフの何名かもそちらへ賛同したとき、今まで見たこともない激しさで彼女は怒鳴った。

「出て行け！　どうせ無くなる大学に目先の保身しか考えられないならここにいる資格はない。出て行きなさい！」
　中止派についたスタッフを失ったとしても、人手なら残った人間で十分だ。だが、ここへきて冷静さを失った指導者を見て、スタッフ達は明らかな動揺を見せていた。
　実際、中止するという十分な根拠は、どこにもなかった。注意報は出ていたが、警報ではなかったのだ。しかし、ここで問題なのは、これまで全員を引っぱってきた菱井が、切り捨てるという行動に出てしまったことだ。悪条件に揺さぶられた学園祭で、スタッフは疲れきっている。最後の最後、菱井は本当の正念場を迎えたのだ。
　彼女は自分で委員室のドアを閉め、上座に向かって歩きながら言った。
「私はいつも、自分があと何年生きられるのかって、考える」
　俺は両手を挙げ、スタッフ達を静かにさせた。ここで空中分解したら、この半年が無駄になる。
「人並みに生きていけば、あと、六十年くらいは生きられるかしら」
　春の実験室と同じ歩き方だ。テンポ六十のメトロノーム。ゆっくりと喋っている。
「でも、その六十年間は一様じゃない。十代でできること、二十代でできること、三十、四十、五十……、死ぬまでの間、その時にしかできないことが、きっとある」
　俺には抑えきれなかった小さな話し声が、菱井の言葉に吸い込まれていくのがわかった。部屋は完全に凪いでいた。菱井は、凪ぎを行く帆船だった。
「だから、やるべきこと、やろうと思うことを、ずっとやってきた。どんなことも、手に入れようとしなければ、絶対に、手に入らない」
　穏やかではあったが、少しずつ、調子が変わってきているのを感じた。口調が速くなり、力強さが増していった。
「あたしは、この学園祭が、今、やるべきことだと思う。そして、そう思ってくれたから、みんなが協力してくれたのだと思う」
　もう、スタッフは完全に引き込まれていた。大丈夫、彼女は、キラー・クイーンだ。
「目を、開こう。あたしたちは、まだ若い！　だから、最後まで攻めてみるべきだと思う。これが終わった先に、あたしは、なにかがあると思う。逃げ回って、得ようとしない人たちには絶対に得られない何かがあると思うの」
　上座の壇上に至った菱井は、抑えた調子で付け加えた。
「辞めたい人は、辞めてくれていい。強制はしないよ。でも、それでも一緒に来てくれるなら、今夜、なにかを手に入れよう」
　彼女の言葉は、字面とはまったく違った意味でその場のスタッフを動かした。それは、「私たち、もうすぐ、若くなくなるんだよ」ということだった。就職すれば、家族ができれば、それでなくても歳をとれば、若くはなくなる。後先考えずに攻め続けることは、できなくなる。
　菱井が口を閉じて、数秒。俺は、一番に手を叩き始めた。俺が、最初に選ばれたスタッフだ。副委員長だ。たとえ心中になったとしても、演出してやるべきだろう。
　さざなみのようだった拍手は、やがて大きなうねりを生んだ。みんな、なにかをしたいのだ。なにかをしたいのに、なにをしたいか、わからない。この半年、菱井はそれを、希望を、与え続けた。
　彼女は左手を挙げた。また凪いだ。
「ありがとう、みんな」
　菱井は胸を張っている。それでこそ、チームを率いるのにふさわしい。
　嵐が来る。
　で？　それが、どうした？

3

まだ、雨は降ってはいなかった。

キャンパス広場に作られたステージは、聴衆たちで埋め尽くされている。高橋たちの草の根的活動は地域密着だったので、特に、あまり娯楽のない周辺住民にとっては質のよい楽しみとなっていたようである。

カラー・クイーンのファンは大きく二つに分けられる。一つは、本家クイーンが活躍していた頃に青春時代を迎えていた人たちで、年齢的には七十代が平均だろう。もう一つは、高橋たちの活躍を目にしてついてきた新しいファン層で、こちらはティーンエイジャが中心。

当初パイプ椅子を並べていた会場はすぐさま立ち見になった。椅子が邪魔で観客が入りきらないのだ。その会場の中央を二分するように、カラー・クイーンのメンバが入場するための花道が存在する。ライブの開始直前、俺たちスタッフは花道に沿うようにして並んでいた。高橋たちが入場するときに全員でハイ・タッチをするのである。

日が暮れて、照明が灯された。俺は、ステージの上を見る。急遽、大雨に備えて仮設のテントを張りはしたものの、強風が心配だった。心なしか、すでに膨らみ始めているような気がする。

……時間だ。

一度、照明が落ちる。本家の歌うキラー・クイーンが流れる中、ライトに照らされたカラー・クイーンが走ってくる。メンバの面々とハイタッチを繰り返す。叩き際、ベーシストの女が、何故か、強く俺を睨んでいった。

高橋はまだ来ない。主役は、最後だ。

高橋以外のメンバが舞台に上がって楽器の調整を始める。彼らが登場したときに大きな拍手をした聴衆は、その様子を見ながらざわついていた。高橋を、待っているのだ。

待ちかねた時がやってきた。

明るく、皆をわくわくさせるイントロ、「ハンマー・トゥ・フォール」。花道を駆けてくる高橋にスポットライトが集中した。俺は、息を呑んだ。今日で終わりにする気か、高橋？

高橋は、通常、初期のフレディ・マーキュリィ――長髪で、細身、女性的に見える美男子――を装っていたが、今夜は違う。晩年のフレディ、袖のないシャツに穴のあいたジーンズ、そして短髪という出で立ちだった。

すれ違うとき、高橋は、俺の首にラリアットを喰らわしていった。苦笑しながら立ち上がって、「楽しんでこいよ！」と、俺は怒鳴った。

高橋は、しょっぱなから飛ばしていた。物凄い声量と圧倒的なピッチコントロールで本家もかくやという歌声を披露した。バッキングも、これに答えた。歌詞の和訳も、彼らの背後で踊っていた。

「一体、俺たちはなんのために戦っているんだ？　すべて身を任せれば傷つく必要はないのに。だがそれでも、ハンマーが振り下ろされるまで、願う未来を叫べるはずなんだ！」

続いて「バイツ・ザ・ダスト」、「ボヘミアン・ラプソディ」が演奏され、一段落となった。がんがんと進んできたライブに観客は荒い息をついていたが、それは奏者とて同じだった。ピアノの上に置いてあるコップからメンバーが水を飲んでいた。

身に着けたヘッドセットから菱井の声がした。

「赤間、まずいことになった」小声だった。

「なんだ？」今、いいところなんだ。

「テントを固定している杭が抜けそうになってる」

気づかないうちに風が強くなってきていた。夜空に星は見えず、いよいよ来たか、という気持ちになった。

花道で見とれていたスタッフたちを　場を白けさせない程度に急がせた。ステージの両サイドと背後には、天井代わりのテントから伸び

たロープが打ちつけられている。今さらどうしようもないので、とにかくスタッフたちで抑えることになった。

ステージでは高橋のＭＣが始まっていた。どっと笑う観客の反応がわかる。俺はステージの右側にいて、菱井と一緒に別々のロープを掴んでいた。

高橋はピアノに向かった。やるつもりだ。輝ける七つの海。

ベースの女が近づいて、一度、彼の肩に触れた。彼女はすぐに離れて、自分の仕事に戻った。相変わらず、無表情だった。

雨が降り始めた。大粒だ。

高橋は、小さく鍵盤に触れてしまい、音が一度鳴った。ニヤっとしながら、

「震えてるんだ」

と言ったため、観客は冗談だと思ってまた笑った。冗談ごとではなかった。高橋は、大きく息を吐いた。それをマイクが拾って、これまたジョークだと思った観客が笑った。

構えた。

雨音が激しくなった。

弾いた。

魔法にかかったようだった。昨夜の彼とは別人だった。十指がそれぞれ独立した生き物のようで、滑らかに協調しながら全体の旋律を紡いだ。

「僕は生き残る。僕は生き残る、僕は生き残る……！」

歌詞も、好調に機能していた。

短い曲が終わったとき、高橋はピアノを立って、フロントに置いてあるマイクスタンドへ向かった。突然、昔の話を始めた。

「僕は、クラシックの人間でした」

えー、という観客の声がしていた。そちらに向いて「意外？」とおどけて、また笑いを取っていた。

「ある日、大きな演奏の前に、どうしても弾けなくなった。それが何故なのか気づけなくて、別の世界なら知れるかと思って、今までやってきました」

笑い声が雨音で上書きされていく。あと何曲かで永遠に彼の演奏を聴くことがなくなるのに、皆、ようやく気づいたようだった。

「僕は楽しんでいなかった。音楽を知らなかった。この学園祭に参加して、そう、知った。僕は、もといた世界に戻ります。楽な道ではないけど、挑戦して、楽しんで、なにかを掴みたい。逃げ回っていたのでは駄目だということが、わかりました。

今までありがとう」

高橋は振り向いて、ベーシストのヘッドフォンを拳で小突いた。彼女は片方をずらし、彼はその耳になにかを囁いた。途端、彼女はベースを床に置き、ピアノの方へ歩いていった。観客に背を向けてピアノの上の水を取り、頭から被った。ヘッドフォンを床に投げ捨てた。自分用のマイクスタンドをフロントまで持っていき、高橋の隣に並んだ。

「失礼。その、暑くて」めったに喋らない彼女の言葉に長年のファンが笑った。

「泣いてるんだ……」菱井が呟いた。

「ワン・ヴィジョン」

息を合わせて、二人で言った。観客が沸いた。シンセのイントロがきて、重なり始めたギターのフレーズが心奪う。二人で歌い始めた。史上初のことだった。

「誰にでも目指すところがある、やらなきゃならないことがある。気持ちも、魂も、生かすべき道は一つだけ……」

歌いだしから空気感がまるで違っていた。ベースの彼女からは正確さが薄れたが、音の響きに気持ちがこもっている。ライブで大事なことは、そこにいる観客と楽しむこと。彼女は今、初めて「ライブ」をしている。カラー・クイーンは、ユニットとして機能し始めた。最初

で最後のこの夜に、彼らは、得ようとして、得たのだ。
その後、曲目は「ウィ・ウィル・ロック・ユー」、「ウィ・アー・ザ・チャンピオン」と続き、お馴染みの曲が計ったように観客を興奮させた。
「ありがとう！」
と、高橋が叫んだ頃には、観客全員がずぶぬれになっていた。体も冷え切っているだろうに、彼らは拍手を止めずアンコールをした。
どっ、という音がして、隣を見ると菱井が倒れこんでいた。彼女が抑えていたロープが地面を離れ、テントの一部が舞い上がった。彼女はそれを無表情に眺めていた。次に、自分の両手を見た。もう、力が入らないのだろう。
「大丈夫かぁ？」
何ごとかと振り向けば、立っていたのは老人だった。最前列で見ていた彼らが、柵をくぐり抜けてこちらへやってきたのだ。「危険ですから」と叫ぼうとする俺を無視して、彼らはロープへ殺到した。
「もう少しだからのぉ、最後くらい、なんかせにゃあ」
大学のことを言っているのか、学園祭のことを言っているのか、それとも、ライブのことか。いや、すべてなのか。一部の観客が止める間もなくやってきて、スタッフと一緒にテントのロープを掴み始めた。ステージでは、アンコールの「アンダ・プレッシャ」が始まった。クライマックスの部分で、高橋が歌っている。
「盲目のフリをして現実に目を向けず、日和見をしていたって駄目なんだ。
愛とともにあり続けるんだ。
たとえそれが自分を傷つけ、致命的に苦しめたとしても――。
もう一度、愛をかざしてみないか。
どうか、もう一度、もう一度、もう一度……。
これが、俺たちの最後のダンス。
（愛とともにいられる）最後のダンス……」
老人たちが力を振り絞り、高橋は自分を振り切り、観客は歓声を天に突き上げた。誰もがそこに魂の輝きを見た。
それは、高橋だけのものではない。彼をそうさせたのは、ここに、こんなにも美しいものがあるのは、間違いない、そこで尻餅をついている、菱井の力なのだ。これは、菱井の輝きだ。
そして、不意に理解した。彼女の生んだ光りを、あの日覗き込まれた瞳の強さを、理解した。
俺たちがどれほど頑張っても、この大学が残されるわけではない。就職に有利になるわけではない。お金にもならない。すべて、意味はない。意味はないが……、それでも例えば、励起された白金を綺麗だと思う心、もうそれがあれば、それを研究したっていい。それで何かが得られなくても、何かを失っても、今夜、こんな風に、胸に残っていくものがある。
そういうことなんじゃないのか？
生きることの意味も、自分が何者であるかということも、探し続ける限り、いつかは見つかる。生きるということは、求め続けることだったのだ。何かを得ようとして何かを失うリスクを恐れるよりも、得ることも失うことも、そのどちらをも欲するのだ。俺は、過不足のある生き方をする、きっと、これから、ずっと。だから、もう俺の人生は、なんてことないものなんかじゃない。違うんだ――。
得ようとしなければ、得られない。求めるものがあるのなら、となりで転んでいる彼女みたいに、手当たり次第に近づいていけばいい。きっとそこには、何かが存在しているはずだ。
だから。
ロープを離したときのまま、彼女は尻餅をついている。ぼんやりと空を見上げて、降り堕ちてくる大粒の雨を見ている。
曲は終わっている。半年間の、彼女の戦いも終わっている。

近づいた。
彼女が、こちらを見る。
たたきつける雨音と、大急ぎで去っていく観衆の雑踏とで、彼女以外の気配がすべて、遮断されている。どんなときも、絶縁されたシグナルは、決められた方向に走るしかない。
彼女は、ゆっくりと右手を差し出した。
お互いぐしゃぐしゃに濡れて、菱井には泥が跳ねていた。
キラー・クイーン。まったく、綺麗なお嬢さんだ。
……綺麗だ。
――手当たり次第に、近づいていけばいい。
俺は、彼女に、手を伸ばす。

（医学部医学科５年）

受賞の喜びを語る

選考を終えて

総評

選考委員長　小野友道

まず、田口宏昭熊本大学附属図書館長に対し、このような学生を対象とした文学賞を創設されたことに満腔の敬意を表したいと思います。

かねて、私は学生諸君の本離れを心配していた一人で、もっと専門領域以外のすばらしい本に出会ってくれないだろうかと願っておりました。

まして文章を書くということに関心を持つ学生が如何ほど居られるのだろうか、今回の文学賞への応募作品が果たして集まるだろうか、いささか危惧いたしておりました。

しかし、それは全くの杞憂でした。

29編もの作品が、文・法・教育など文系のみならず、工・理・医・薬などから、さらに大学院生から届きました。びっくりするとともに、学生諸君に謝らねばと思ったことでした。図書館側での第一次選考で絞られた8編について、3人の選考委員で最終選考をすべく平成20年12月17日に選考委員会を開催しました。

前もってそれぞれの審査委員が熱心に読ませていただきました。原稿用紙50枚の制限ある長さの中で、8作品ともそれぞれ大変な努力、工夫がなされていることが窺われました。個々の作品について、それぞれの作者のメッセージが、どれほどの響きを持って私たちに伝わってくるか、それを示す文章の効果的な表現力はどうであるかなどなど、討論させていただきました。

その結果、『深海魚』が全員一致で、大賞受賞作品としてすんなり決定いたしました。

他の選考委員の先生方の講評にあるように物語のストーリ性が抜きん出ていました。かなり力量のある作者であろうと思いました。是非、このような文学作品を書き続けていただきたいものです。選考委員会終了後、作者が医学部の学生であること知りました。人間の「生き死に」について今後も思索を深めてほしいものです。『森は語らない』も秀作でした。出だしと終章の飛行機の使い方などに高い評価がありました。『カラー・クイーン』も音楽とその説明を背景に経時的に進行する技巧がイメージを具体にしています。お二人の作者にも、他の審査委員の講評を参考にして、今後も創作活動を続けてくださることを期待します。

その他にもそれぞれの委員が出し合った秀作がありましたが、前述の2作品を優秀賞と決定させていただきました。

選考するという責任ある作業にいささかの緊張を致しましたが、一方で、現代の学生の情熱を十分感じたすばらしい時間を、我々選考委員は楽しむことが出来たことを感謝したいと思いました。

この第1回を契機に、「東光原文学賞」が歴史を積んでいく中で、熊本大学から多くの文学作品が生まれ、それらが育ってくれることを

願って止みません。

おの　ともみち　熊本大学顧問・名誉教授・熊本保健科学大学学長

講評

選考委員　西川盛雄

文学は言葉による人間の生存の証（あかし）であると思われます。その際「何を」、「如何に」表現するかが問題となりますが、「何を」に関しては作者の伝えたい深層のメッセージに関わります。「如何に」の部分は文体と相俟って地の文と会話体とのバランスのとり方や用語、文の簡潔さや描写力、比喩の用い方などメリハリの効いた効果的な表現形式が大切になります。ストーリーの運びの前景と背景の連関性は特に大切です。

大賞の『深海魚』は構成、物語の運びや連関性、人間の生死をめぐるリアリティの描写に優れ、第一位候補として推薦いたしました。この作品は人間の生死を含む心理洞察が深く、読者の琴線に触れて少なからざる感動を喚起する作品です。自らの存在を魚に託す理由を魚になった（自死した）父の運命とダブらせるという比喩が表現効果をあげています。文体は無理なく読んだ後も余韻深く感動を呼ぶ秀逸の作品であると思われます。

『カラー・クィーン』は学園祭をめぐる身近なテーマが背景となり、音楽と背景時間の推移が心に残ります。「意味」の追求を全体の背景モティーフとしながら最後の学園祭という緊迫した状況の中でストーリーが展開されていきます。その表層の振る舞いと深層の心理との往還の描写は印象深いものがありました。

『森は語らない』は構成に意を用いて青春の悩みや不安を描き、生きるということの意味探求が主題となっています。出だしと結末の連関性は出色です。屋久島の森に今まで感じたことのないものを感じて主人公は大学を離れて民宿をするようになる。この作品は若者が自らの居場所を求め、生の意味を探求するという心の姿をモティーフにした秀作です。

他に『優しい眼』と『ヴェスレー』は佳品ではありましたがもう少し書き深めて欲しいと思いました。前者は人間存在における記録と記憶の問題を提起して鋭く、カメラのアングルのあり方をめぐって主人公と同級生との対比が印象的でした。背景に聞こえるカメラのカシャカシャという音も効果的です。後者はプロットの運びや文体のユニークさはありながらも地の文と会話文の使い分けのメリハリや用語に一考が必要なように思いました。

総じて今回のそれぞれの応募作品には大学生ならではのモティーフと青春のドラマ性と生きることへの真摯さが伺われて好感がもてました。審査に当たっては散文（小説）という形式ではありますが、はじめての試みで29編もの作品が揃いました。一次選考と二次選考を行いましたが、いずれも慎重かつ公平に選を行いました。若者の作文能力や文学離れが時に問題となる昨今の傾向にあって今回の試みは有意義なことであったと思います。今後のこの文学賞の発展を願うばかりです。

にしかわ　もりお　教育学部教授

講評

選考委員　西槇偉

一次選考を通過した八作品を読んだ。みな光るものがあり、感性のみずみずしさが感じられた。

とくに『深海魚』はインパクトがあった。冒頭は段落が短く、文頭の文字を下げていなかったり、「も」が「の」になっていたりと粗っぽい印象を受けた。しかし、読み進むうちにストーリーにひきこまれていった。物語の展開がうまく、文章にもリズムがあり、作者の語り聞かせる力は非凡だ。父親の死を受け入れる「ぼく」の物語とクラスメート「由香子」の家庭の不和を重ね、不安定な少年少女の心理を「魚」に託して描く。「感動を呼ぶ作品」として、全場一致で「大賞受賞作」と決まった。

それから、わたしが注目したのは『Your eyes closed』『ヴェスレー』『森は語らない』の三作であった。それらの長所と短所を併せて評してみよう。落ち着きのある文章で、少女の成長、恋心の芽生えなどをややコミカルに描いた『Your eyes closed』では、「シライ」「ナカタ」が悪者扱いされ、人間らしさを付与されていない。『ヴェスレー』は、作者のすぐれた筆力にもかかわらず、テーマが曖昧模糊としている。『森は語らない』はよく書けているが、村上春樹の影響を乗り越えることが今後の課題であろう。

『Your eyes closed』と『ヴェスレー』はほかにも欠点を指摘され、最終的に『森は語らない』と『カラー・クイーン』の二作が優秀賞に選ばれた。後者はやや説教臭があるとはいえ、学園祭における青春群像を力強く描いた。

八作品のうちの三作品に、文学に音楽（『カラー・クイーン』）、絵画（『虹色水彩』）、写真（『優しい目』）など異種芸術表現をもって融合させようとする試みが見られ、また全体的に表現の多様性、幅広さがあったと思う。若者の表現意欲を感じる。

これから「東光原文学賞」はそうした意欲をうけとめ、文学を志す諸君の格好の力試しの場となるであろう。次回から投稿が増えると思われるが、一つだけ老婆心からの忠告を聞いていただきたい。優秀な作者となるには、これまでの文学遺産を貪欲に吸収消化し、文学表現の「基礎体力」を身に付ける必要がある。そうすれば、諸君の表現意欲と感性からきっと傑作が生れるにちがいない。

にしまき　いさむ　文学部准教授

日誌（平成20年11月～平成21年２月）

11/5	秋季図書館ガイダンス
11/17	第５回附属図書館係長会議
11/19	秋季図書館ガイダンス
11/21	第３回附属図書館運営委員会
11/25	秋季図書館ガイダンス
12/1	熊本県内図書館職員レファレンス業務中級者研修
12/3	秋季図書館ガイダンス
12/4	九州地区国立大学図書館長・事務（部・課）長会議（九州大学）
12/10	秋季図書館ガイダンス 国立大学図書館協会電子ジャーナルシンポジウム（東京） ラフカディオ・ハーン・ミニシンポジウム
12/11-19	第４回附属図書館運営委員会（書面会議）
12/17	東光原文学賞選考委員会
12/18	第６回附属図書館係長会議
1/16	東光原文学賞表彰式
1/17-18	大学入試センター試験
1/22	第７回附属図書館係長会議
2/19	第５回附属図書館運営委員会 第８回附属図書館係長会議
2/25-26	熊本大学個別学力検査
2/26	附属図書館長候補者推薦委員会 医学系分館長候補者選挙

人事（平成20年11月～平成21年２月）

■ 退職（平成21年２月28日付）

菊井　慶子（医学系分館担当）

■ 採用（平成21年２月16日付）

脇崎　千秋（医学系分館担当）

編集を終えて

東光原文学賞の創設に至った経緯は田口館長のすでに記された如くである。

第一回記念号編集の栄に浴した身としてさらに贅言を弄することは本意でないが、前号・前々号において特集したように、平成20年が源氏物語千年紀にあたっていたことを再度想起していただければ、文学賞創設といういわば一つの事件に対する興趣も一段と深まるのではないかと思う。

なお、三作品が水・空・音楽という共通の要素に彩られていることは、興味深いテーマを内包しているようにみえるが、実はまったく偶然の産物である。誤解される向きのないよう一言しておく。

東光原：熊本大学附属図書館報
第53号　平成21年3月刊

発行　熊本大学附属図書館
〒860-8555 熊本市黒髪2丁目40番1号
Tel.096(342)2273 Fax.096(342)2210
編集　浦田博臣　岩岡仁美　笠　彩子
URL　http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/tokogen/